

拓殖大学 F D 委員会

# 令和2年度 学修行動調査レポート

令和3年7月

# はじめに

本学は、大学の大衆化と学生の多様化が一層進む中、大学教育の質を社会に保証していくことが求められており、これに対応するために各種の施策に取り組んでいる。

大学基準協会「大学評価研究」（第13号2014年8月）において、「現状の教育課程の内容が、学生の主体的な学修を十分に促す内容となっているか、学生が卒業までに教育目標に沿った学修成果を十分に達成できているかを検証し、今後の具体的な改善方策につなげていくPDCAサイクルを確立する必要がある。そのためには、学修時間・学修行動の実態把握が必要となる」との学修行動調査の必要性が述べられている。この趣旨を踏まえ、本学では、学生の質保証や学修成果の可視化への取組に向け、学生本人が、自らの課程を通じた学修成果を把握するために、教育の学修経験を問う「学修行動調査」を院生を含む全ての学生を対象に平成30(2018)年度から実施している。

令和2(2020)年度における学修行動調査結果に対する所見では、卒業・修了認定・学位授与の方針に掲げる目標値を学生が達成しているかを把握し評価を行うとともに、その結果を踏まえ、「教育課程や教育内容・方法などの改善方策」を示している。

# 目次

● 調査目的／調査概要	3
● 回答者プロフィール	4
● 授業中での経験	13
● 授業時間外の学修態度	20
● 本年度の週当たりの学修等時間	25
● 入学時と比べ、身に付いた学修成果・経験	32
● 学部設問項目	44
● 学修行動調査結果に対する所見	48

# 調査目的／調査概要

## <調査目的>

本調査は、学生の主体的な学修を促す教育課程となっているか、卒業・修了時まで  
教育目標に沿った成果が上がっているかなどを検証し、その結果を教育課程や授業の  
改善に資することを目的に実施した。

## <調査概要>

- ・ 調査方法：インターネット調査（Web調査：拓殖大ポータルからリンク）
- ・ 調査対象：拓殖大学・学生、大学院生(約1万人)
- ・ 調査期間：2021年1月15日（金）～2021年2月19日（金）
- ・ 回答者数：2519名

	商学部	政経学部	外国語学部	工学部	国際学部	学年計
1年生	299	365	123	193	161	1141
2年生	170	166	43	115	76	570
3年生	96	119	31	77	58	381
4年生	95	108	22	75	40	340
学部計	660	758	219	460	335	2432

	学年計
博士課程前期 1年	47
博士課程前期 2年	26
博士課程後期 1年	3
博士課程後期 2年	4
博士課程後期 3年	3
修士課程 1年	0
修士課程 2年	4
大学院生計	87

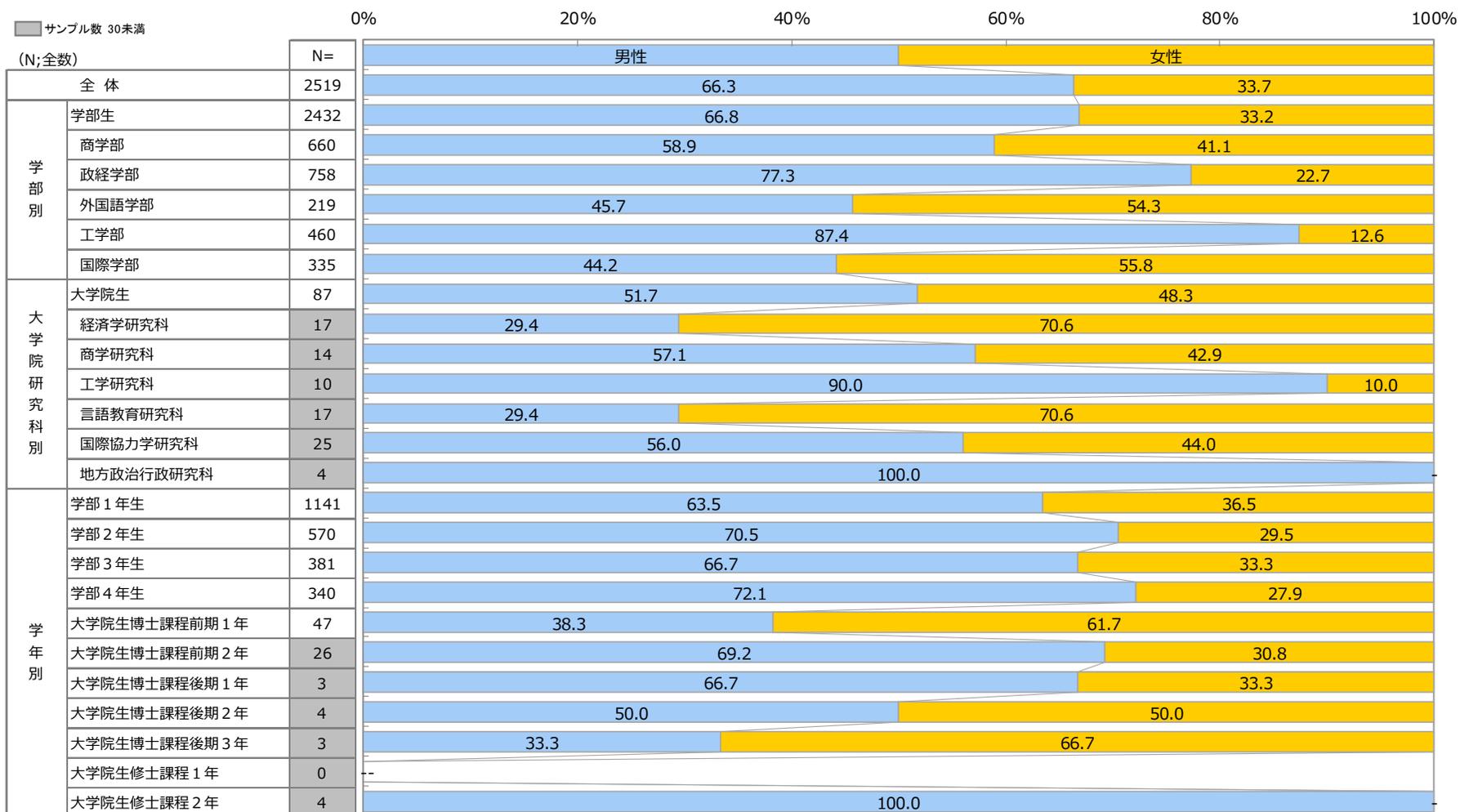
- ・ 調査主体：拓殖大学
- ・ 調査実施：ビデオリサーチ

# 回答者プロフィール

# 性別

Q1.あなたの性別をお知らせください。(SA)

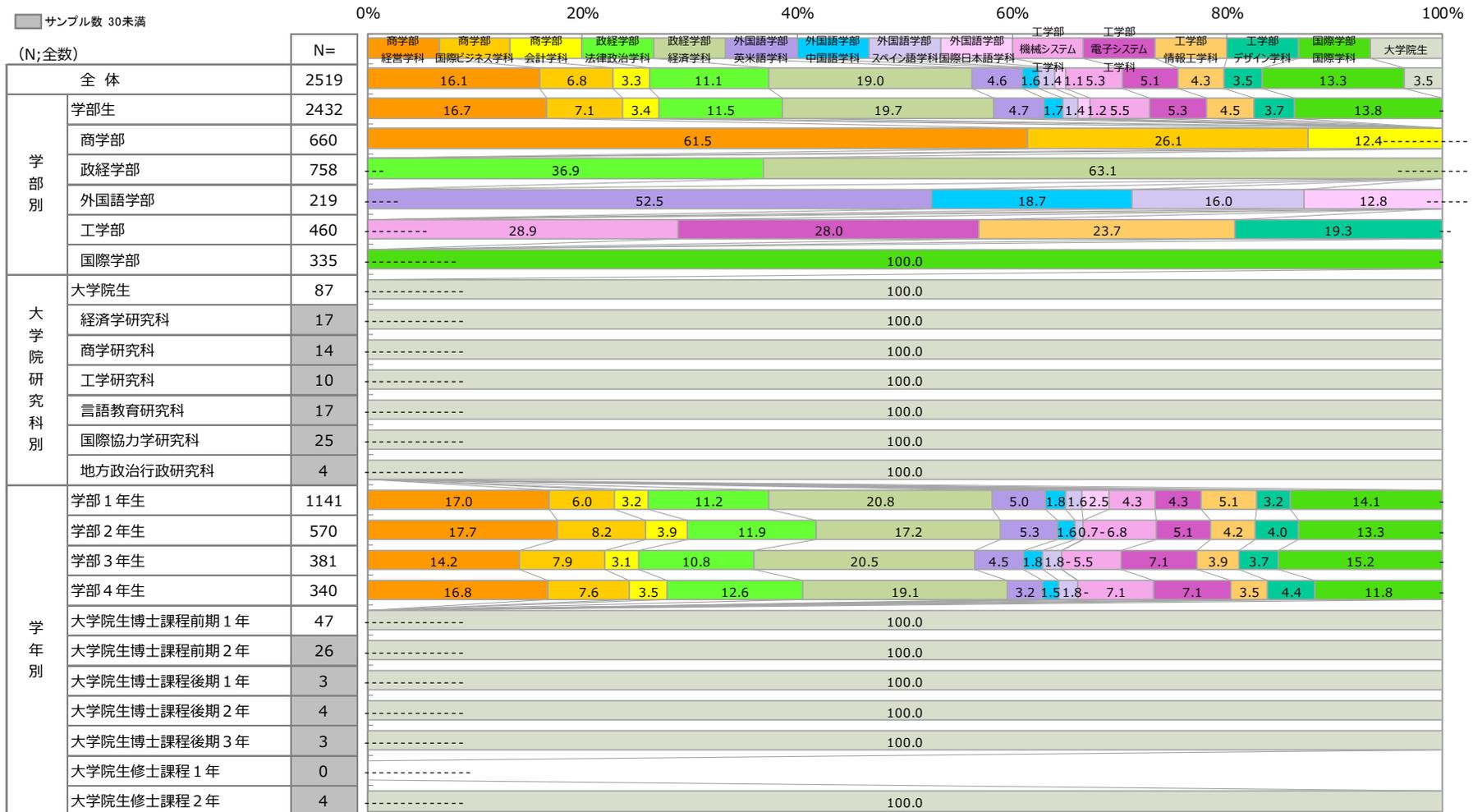
- ・性別は、全体で「男性」66.3%、「女性」33.7%である。
- ・学部生、大学院生いずれも「男性」が「女性」を上回る。  
学部生の中では、外国語学部、国際学部は「女性」が「男性」を上回る。



# 所属（学部生）

Q2.あなたの所属をお知らせください。（SA）

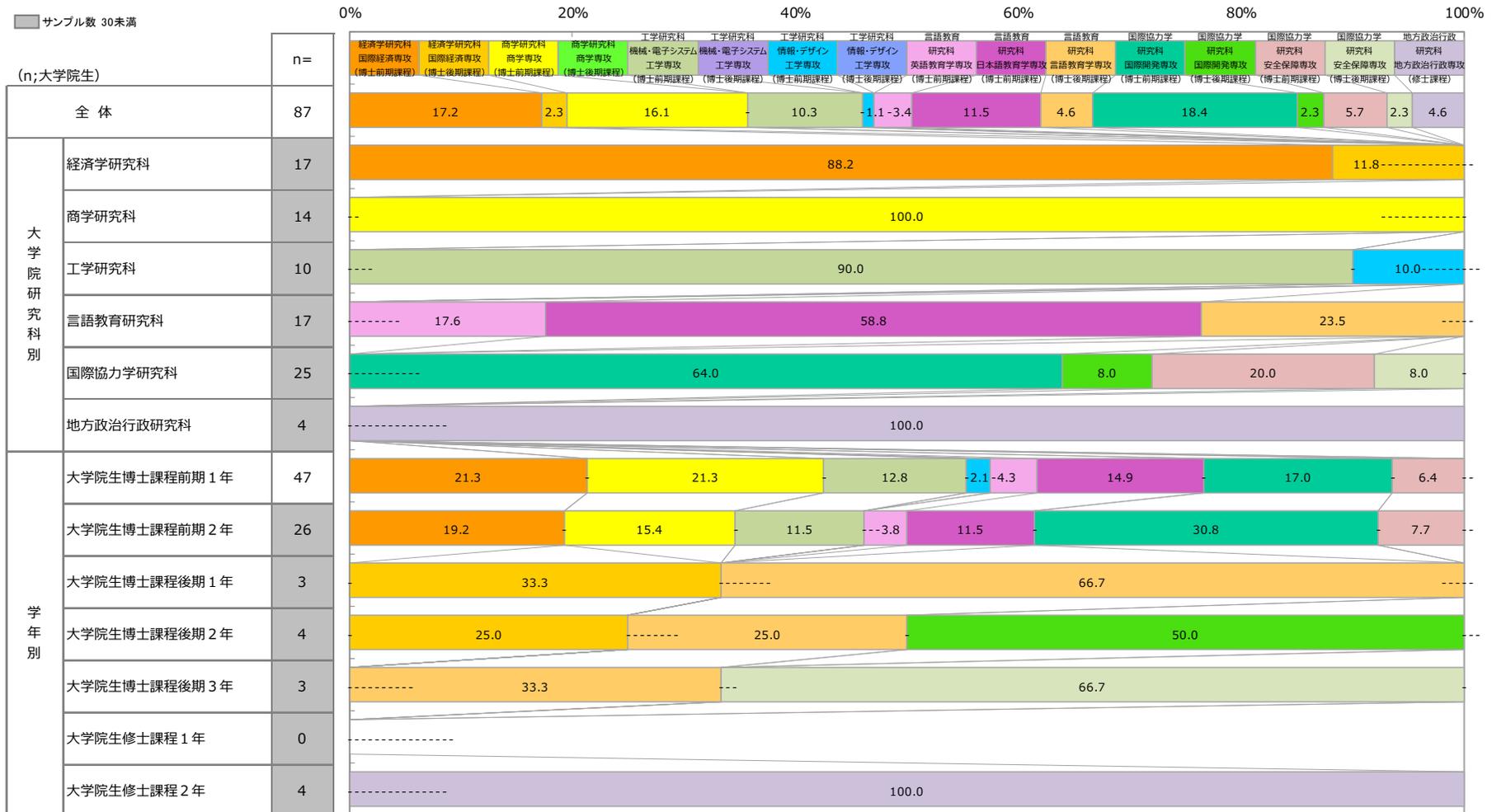
- ・所属は、全体で「政経学部 経済学科」が19.0%、「商学部 経営学科」が16.1%、「国際学部 国際学科」が13.3% 「政経学部 法律政治学科」が11.1%で10%を上回る。  
 なお「大学院生」は3.5%である。（詳細は、次頁参照）



# 所属（大学院生）

Q2SQ.あなたの所属をお知らせください。（SA）

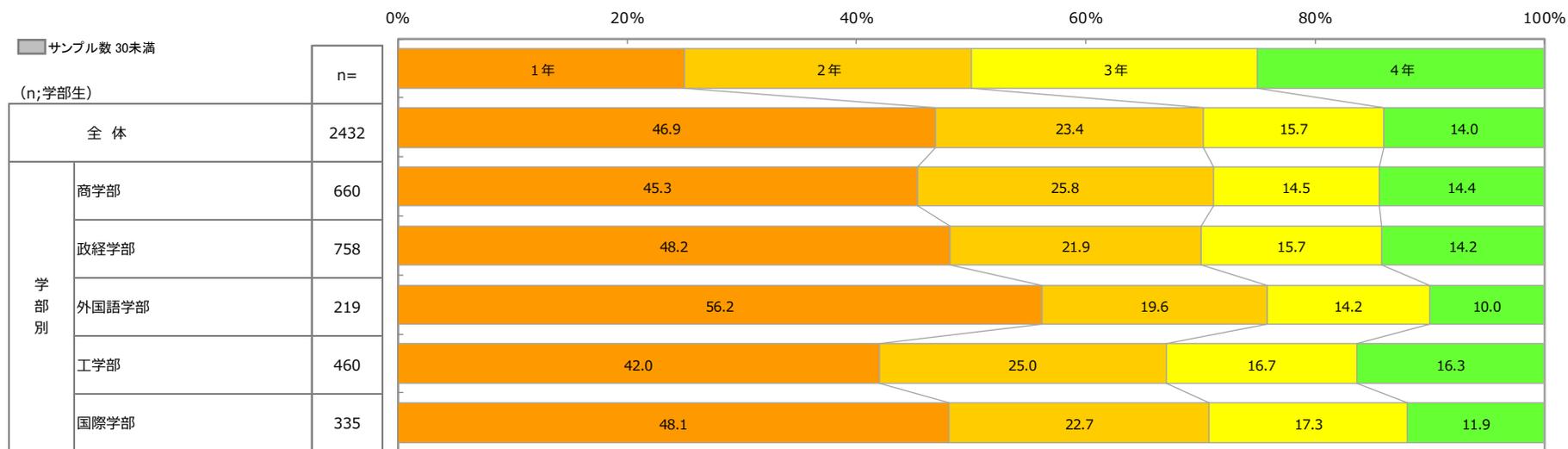
- ・大学院生の所属は、「国際協力学研究科 国際開発専攻（博士前期課程）」が18.4%、「経済学研究科 国際経済専攻（博士前期課程）」が17.2%、「商学研究科 商学専攻（博士前期課程）」が16.1%、「言語教育研究科 日本語教育学専攻（博士前期課程）」が11.5%、「工学研究科 機械・電子システム工学専攻（博士前期課程）」が10.3%で10%を上回る。



# 学年（学部生）

Q2SQ2.あなたの学年をお知らせください。（SA）

- ・学部生の学年は、「1年」が46.9%、「2年」が23.4%、「3年」が15.7%、「4年」が14.0%である。



# 学年（大学院生）

Q2SQ3.あなたの学年をお知らせください。（SA）

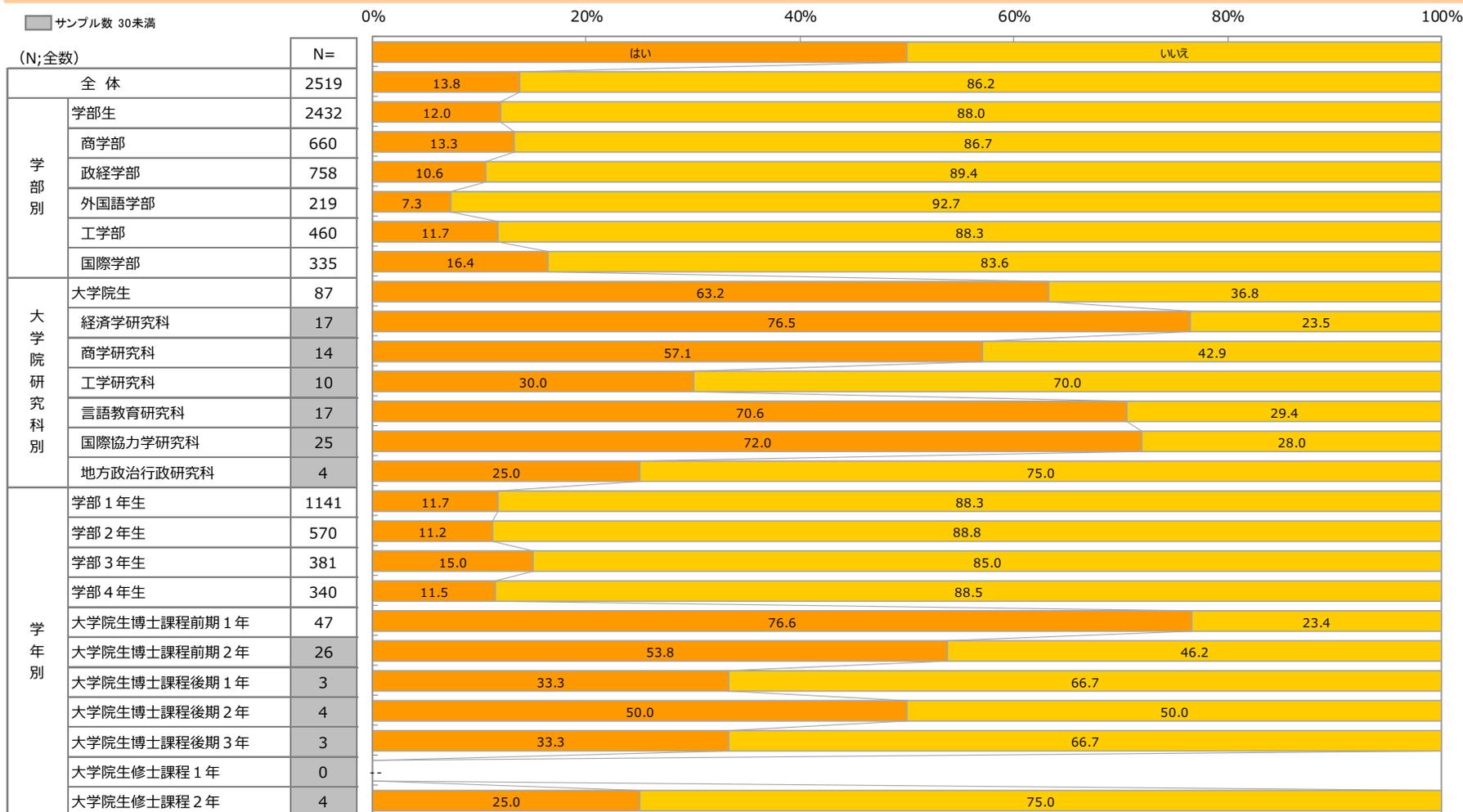
- ・大学院生の学年は、「博士課程前期1年」が54.0%、「博士課程前期2年」が29.9%である。「博士課程前期」が合計80%以上を占める。



# 外国人留学生比率

Q3.あなたは外国人留学生ですか。(SA)

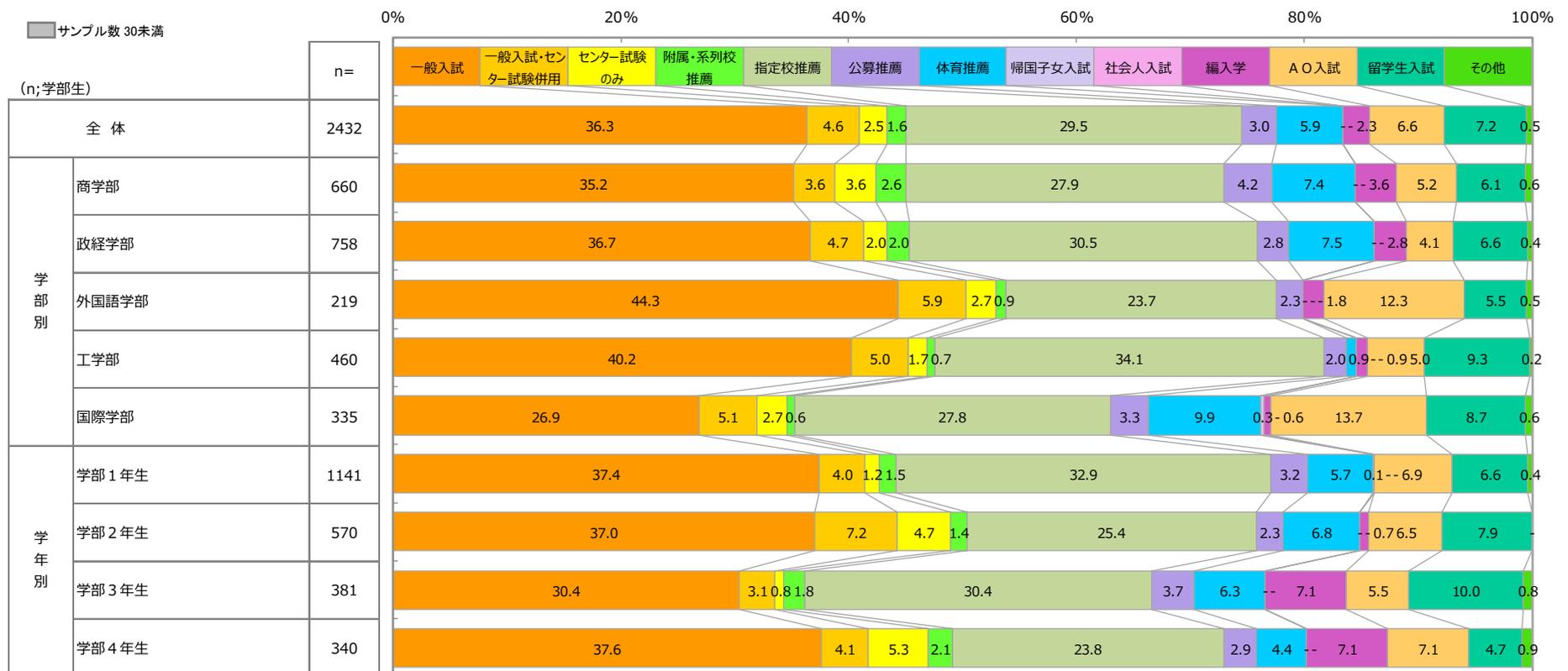
- 外国人留学生比率は、全体の13.8%で、学部生では国際学部（16.4%）、商学部（13.3%）、工学部（11.7%）、政経学部（10.6%）で10%以上である。  
大学院生では63.2%と半数以上が外国人留学生である。



# 入試種類（学部生）

Q4. 拓殖大学へはどのような選抜方法で入学しましたか。  
(SA)

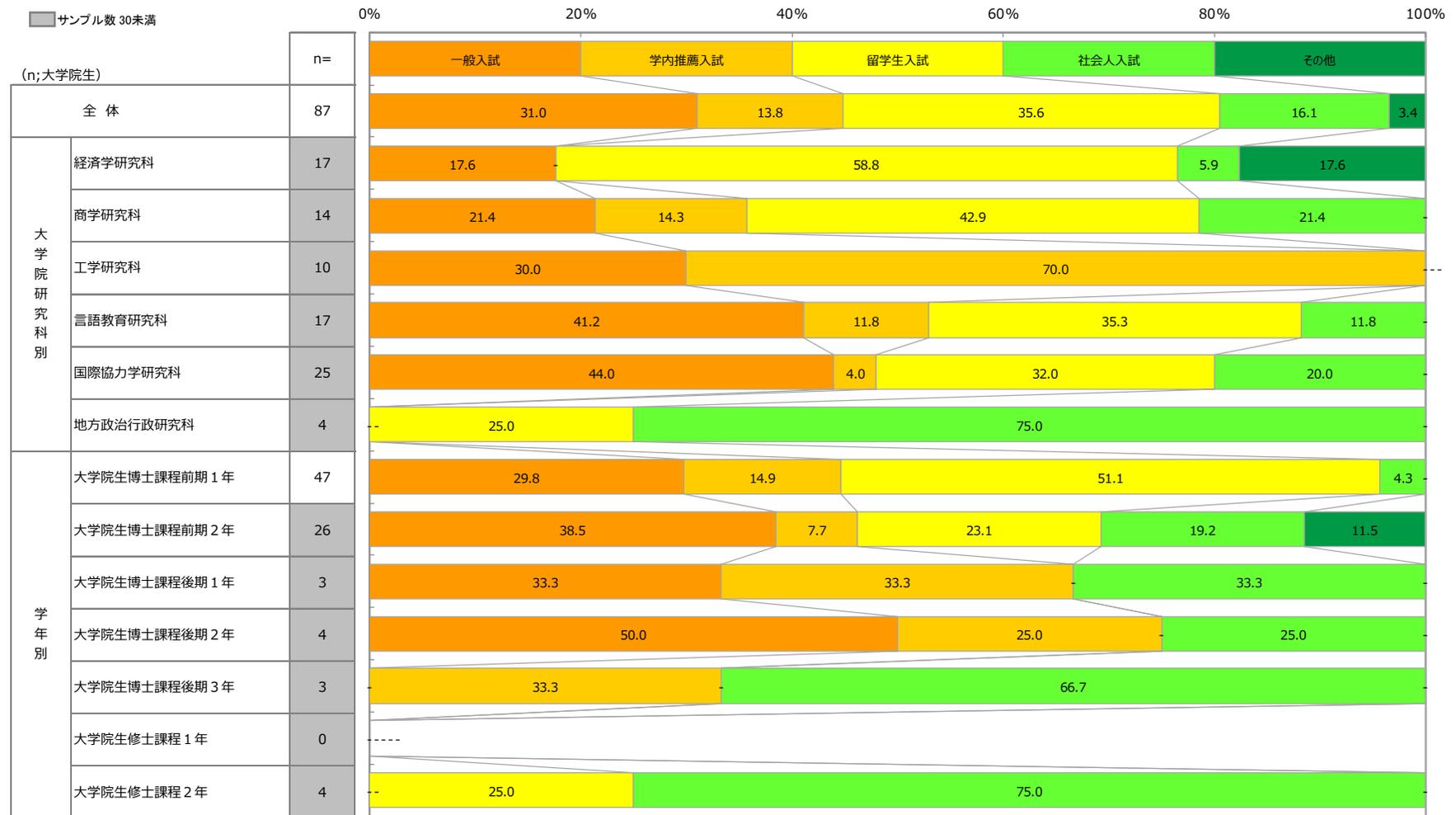
- ・学部生の入試種類は、全体では「一般入試」が36.3%で最も多く、「指定校推薦」が29.5%で続く。
- ・学部別では、国際学部で「指定校推薦」が「一般入試」を上回る（+0.9pt）。他の学部では「一般入試」が最も多い。
- ・学年別では、学部3年生で「一般入試」と「指定校推薦」が30.4%で同率、他の学年では「一般入試」が最も多い。



# 入試種類（大学院生）

Q5. 拓殖大学大学院へはどのような選抜方法で入学しましたか。（SA）

- ・大学院生の入試種類は、「留学生入試」が35.6%で最も多く、次いで「一般入試」が31.0%、「社会人入試」16.1%と続く。



授業の中での経験

# 自分の考えや課題を発表する授業有無

Q6.自分の考えや課題を発表する授業はありましたか。  
(SA)

- ・自分の考えや課題を発表する授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の76.5%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の23.5%を大きく上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を大きく上回る。「あった計」をみると、学部生では国際学部が88.7%で最も高く、外国語学部が87.7%で続く。また、大学院生は「あった計」が97.7%（全体より+21.2pt）に達する。
- ・学年別で「あった計」をみると、学部4年生は84.1%で最も高く、続いて学部3年生の80.8%となった。



# 教員への質問・意見を述べたことの経験有無

Q7.教員に質問したり、意見を述べたことはありましたか。(SA)

- ・教員への質問・意見を述べたことの経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の63.2%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の36.8%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。なお、「なかった計」は、全体に比べ商学部で6.2pt上回っている。「あった計」をみると、学部生では外国語学部が71.2%（全体より+8.0pt）で特に高く、工学部が64.6%（全体より+1.4pt）で続く。また、大学院生は「あった計」が95.4%に達する。
- ・学年別で「あった計」をみると、学部4年生は70.6%で最も高く、続いて学部2年生の62.6%となった。



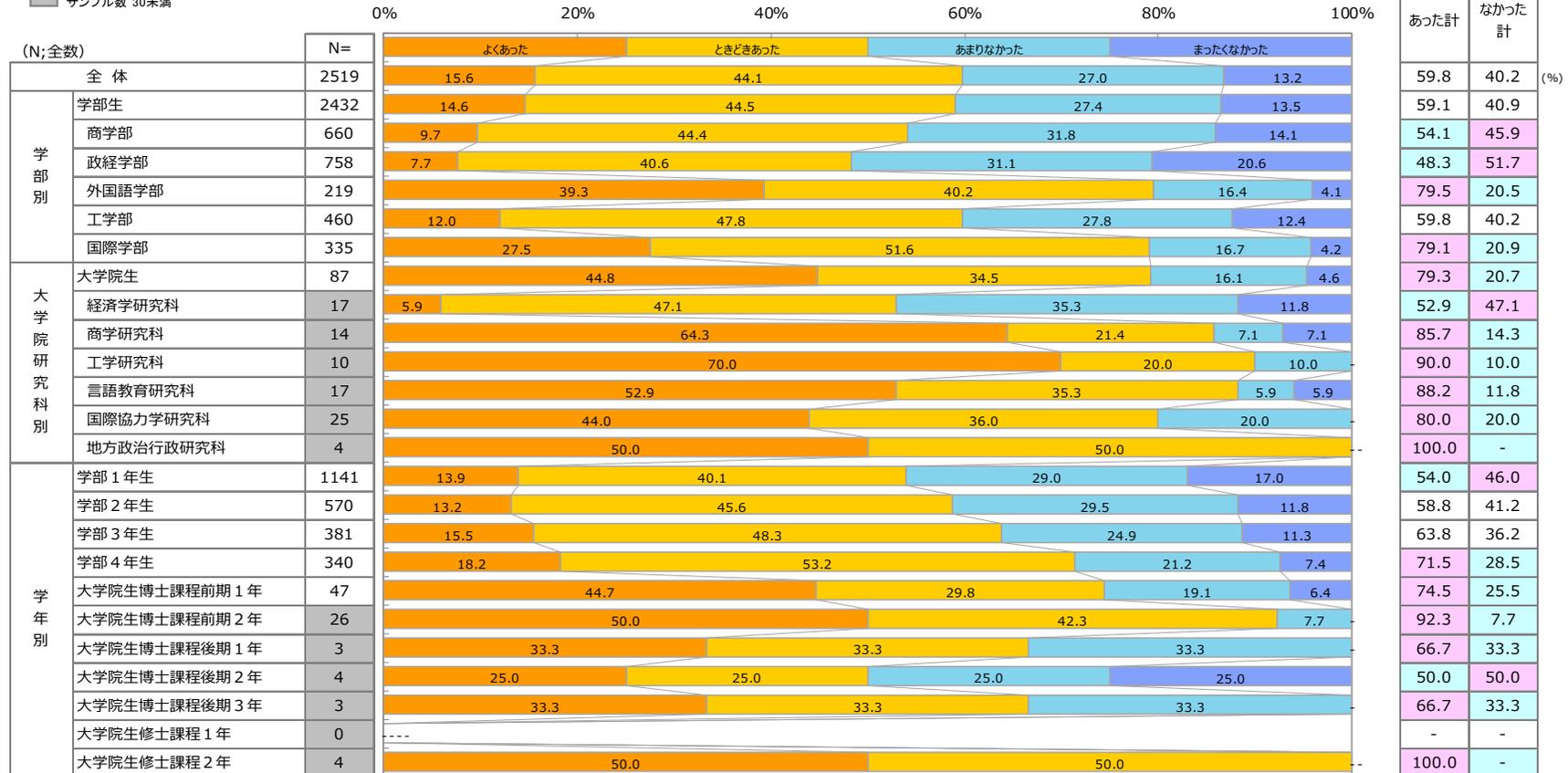
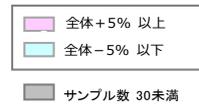
■ サンプル数 30未満



# 学生同士が議論する授業有無

Q8. 学生同士が議論する授業はありましたか。(SA)

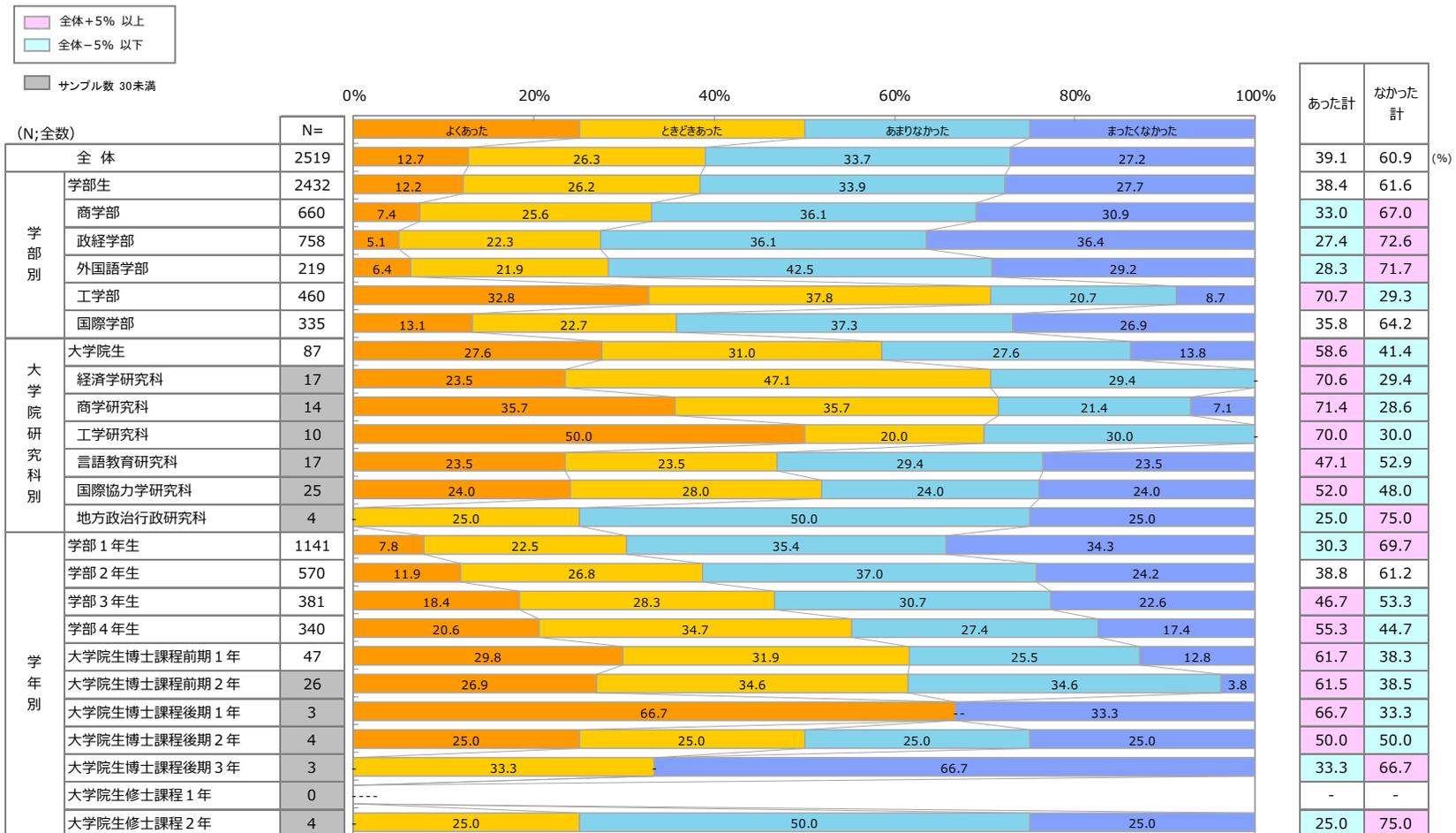
- ・ 学生同士が議論する授業が「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は全体の59.8%と、「なかった計（あまりなかった＋まったくなかった）」の40.2%を上回る。
- ・ 学部別では、政経学部以外の各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。政経学部では「あった計」48.3%に対し「なかった計」が51.7%であった。「あった計」をみると、学部生では外国語学部が79.5%（全体より＋19.7pt）で最も高く、国際学部が79.1%（全体より＋19.3pt）が続く。また大学院生は「あった計」が79.3%。
- ・ 学年別では、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。



# 演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無

Q9. 演習、実験、実習、フィールドワークなどを通して体験する授業はありましたか。(SA)

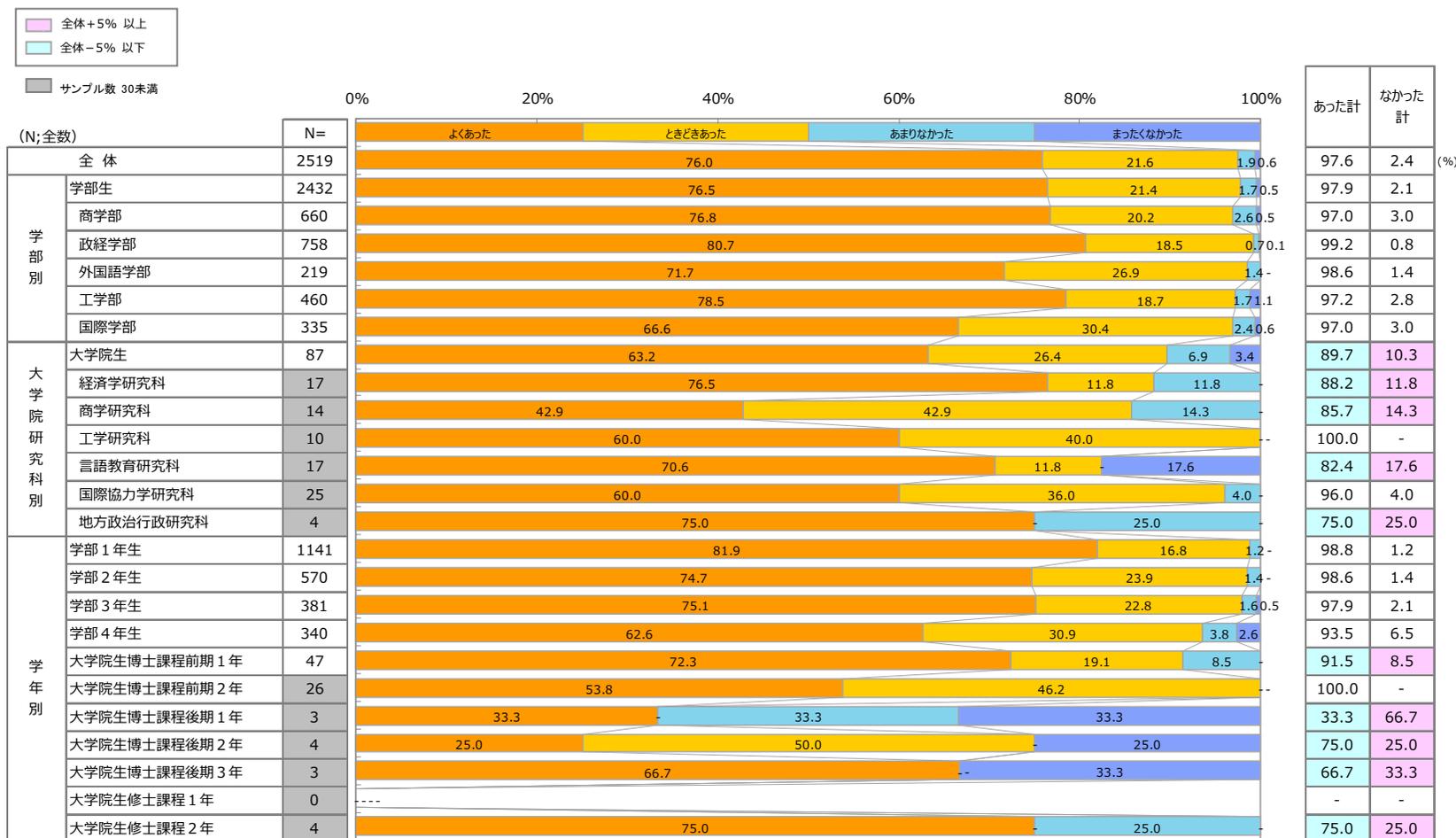
- ・ 演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の39.1%で、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の60.9%を下回る。
- ・ 学部別では、工学部のみ「あった計」が、「なかった計」を上回る。また、大学院生の「あった計」は58.6%であった。
- ・ 学年別で「あった計」をみると、学部4年生は55.3%で最も高く、続いて学部3年生の46.7%となった。



# 定期的な小テスト・レポートのある授業有無

Q10. 定期的に小テストやレポートが課せられた授業はありましたか。(SA)

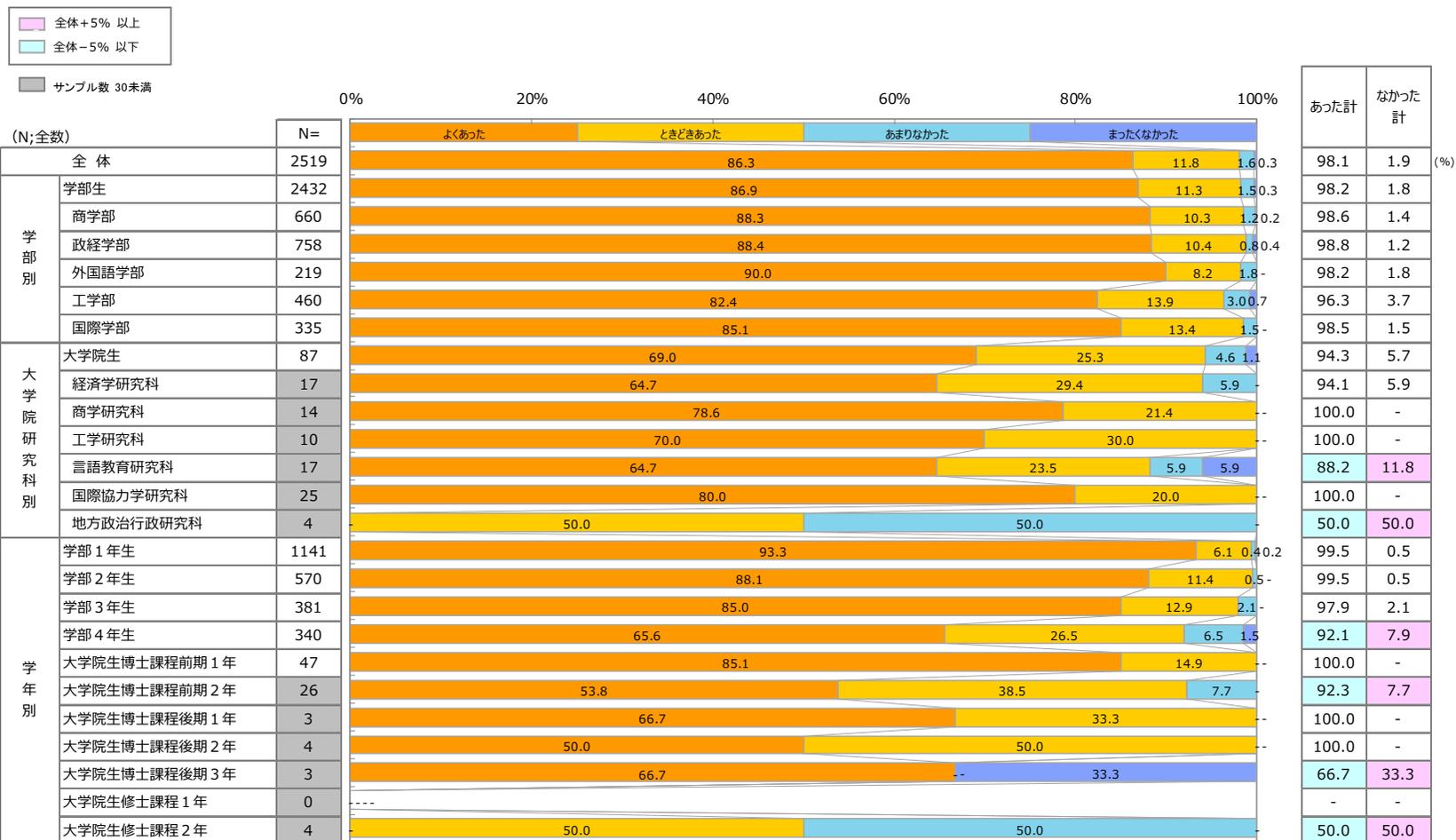
- ・ 定期的な小テスト・レポートのある授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の97.6%に達した。
- ・ 各学部をみても「あった計」は90%台後半で大きな差はみられない。  
また、大学院生の「あった計」は89.7%。
- ・ 学年別で見ると、わずかな差ではあるが、学年が下がるにつれて「あった計」は上がる。



# Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業の有無

Q11.Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業はありましたか。(SA)

- Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の98.1%に達した。
- 各学部をみても「あった計」は90%台後半と大きな差はみられない。また、大学院生の「あった計」は94.3%。
- 学年別で「あった計」をみると、学部1年生と学部2年生の99.5%で最も高く、続いて学部3年生の97.9%となった。

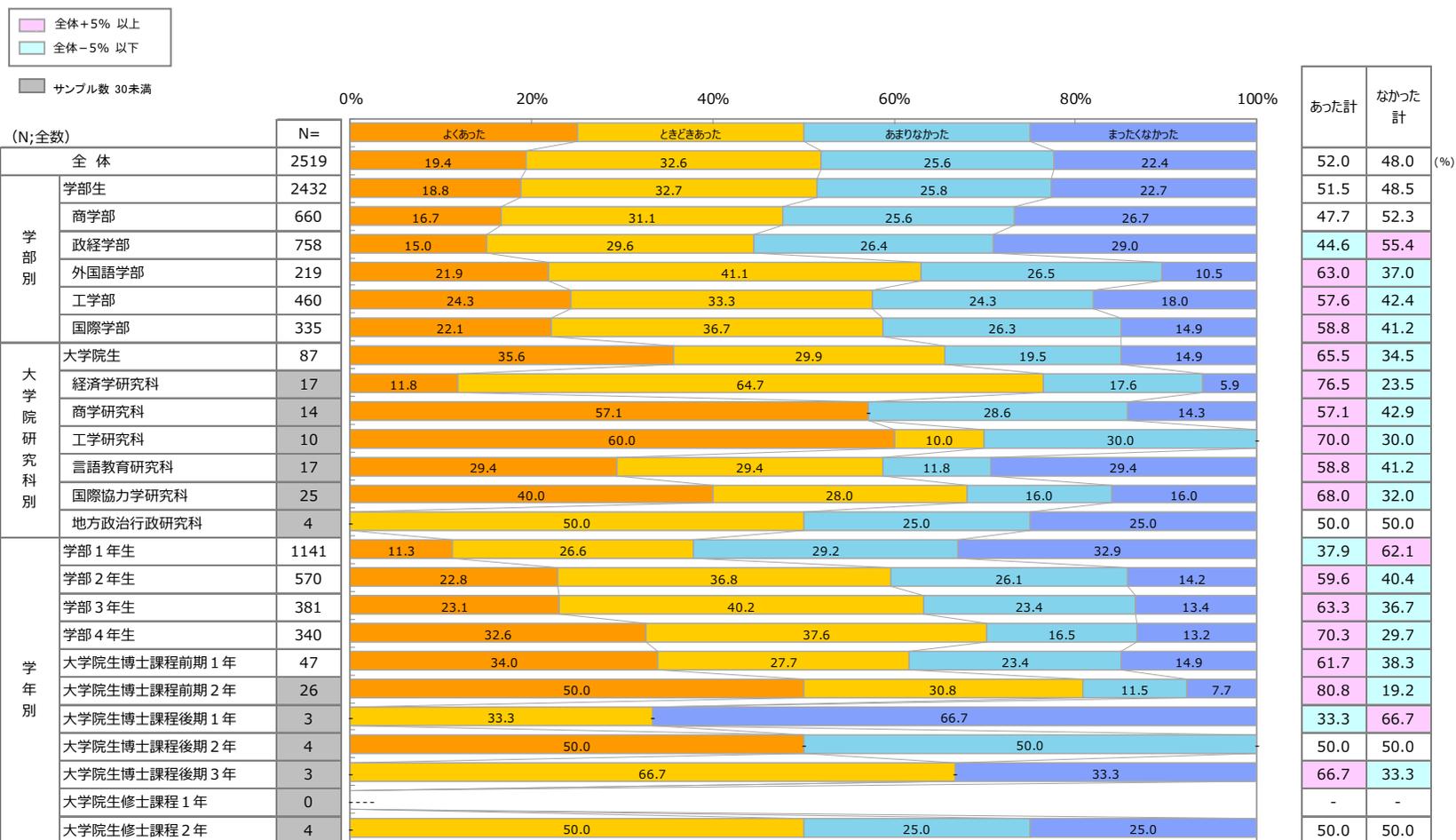


# 授業時間外の学修態度

# 他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無

Q12.他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強したことがありますか。(SA)

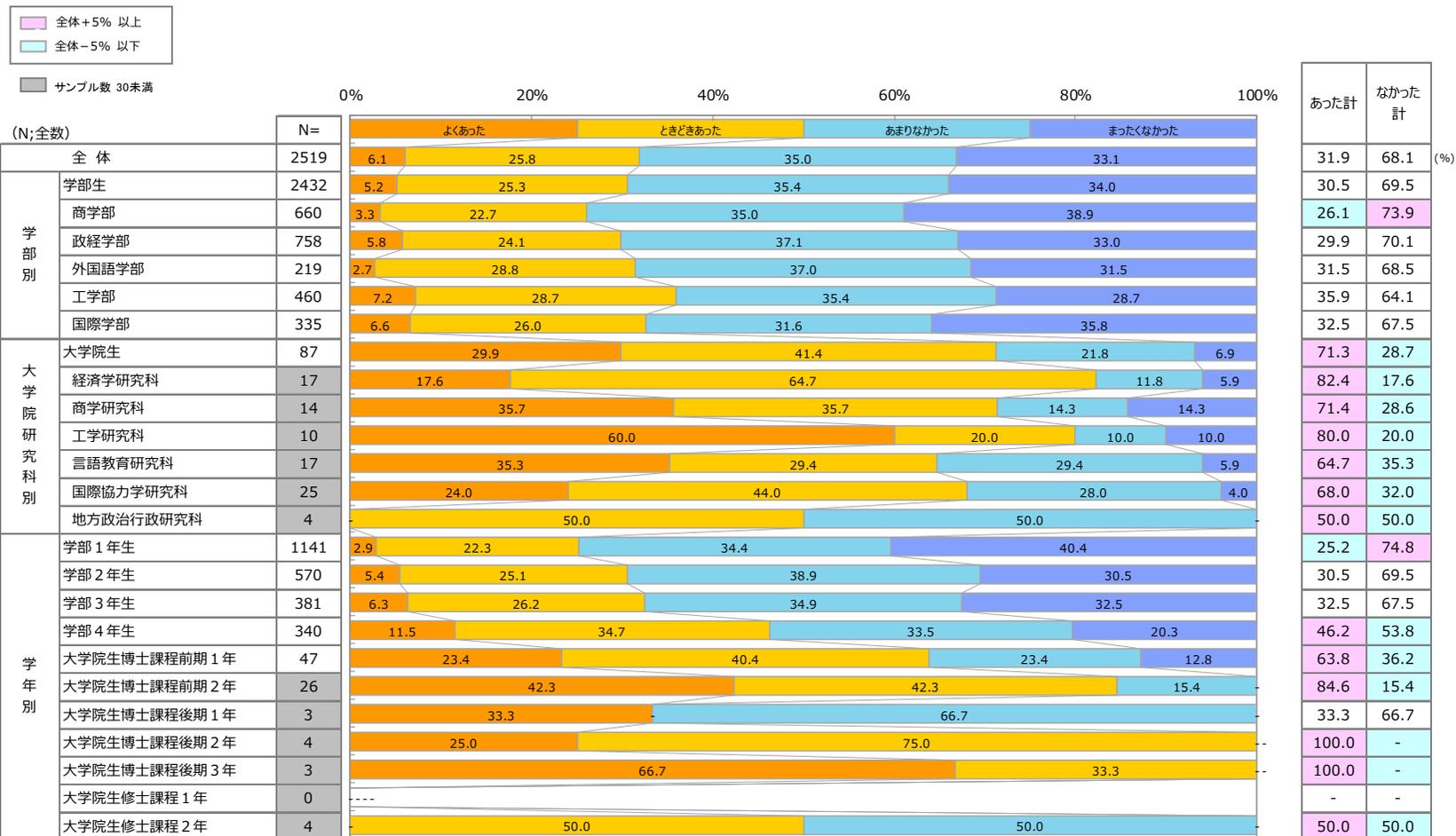
- ・他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の52.0%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の48.0%をやや上回る。
- ・学部別では、商学部、政経学部以外の各学部では「あった計」が「なかった計」を上回る。「あった計」をみると、学部生では外国語学部が63.0%で最も高い。大学院生は「あった計」が65.5%。
- ・学年別では、学部4年生が70.3%で最も高く、学部3年生の63.3%と続く。学部1年生は、「あった計」が37.9%と「なかった計」を下回っている。



# 教職員への学修に関する相談経験有無

Q13.教職員に学修に関する相談をしたことがありましたか。(SA)

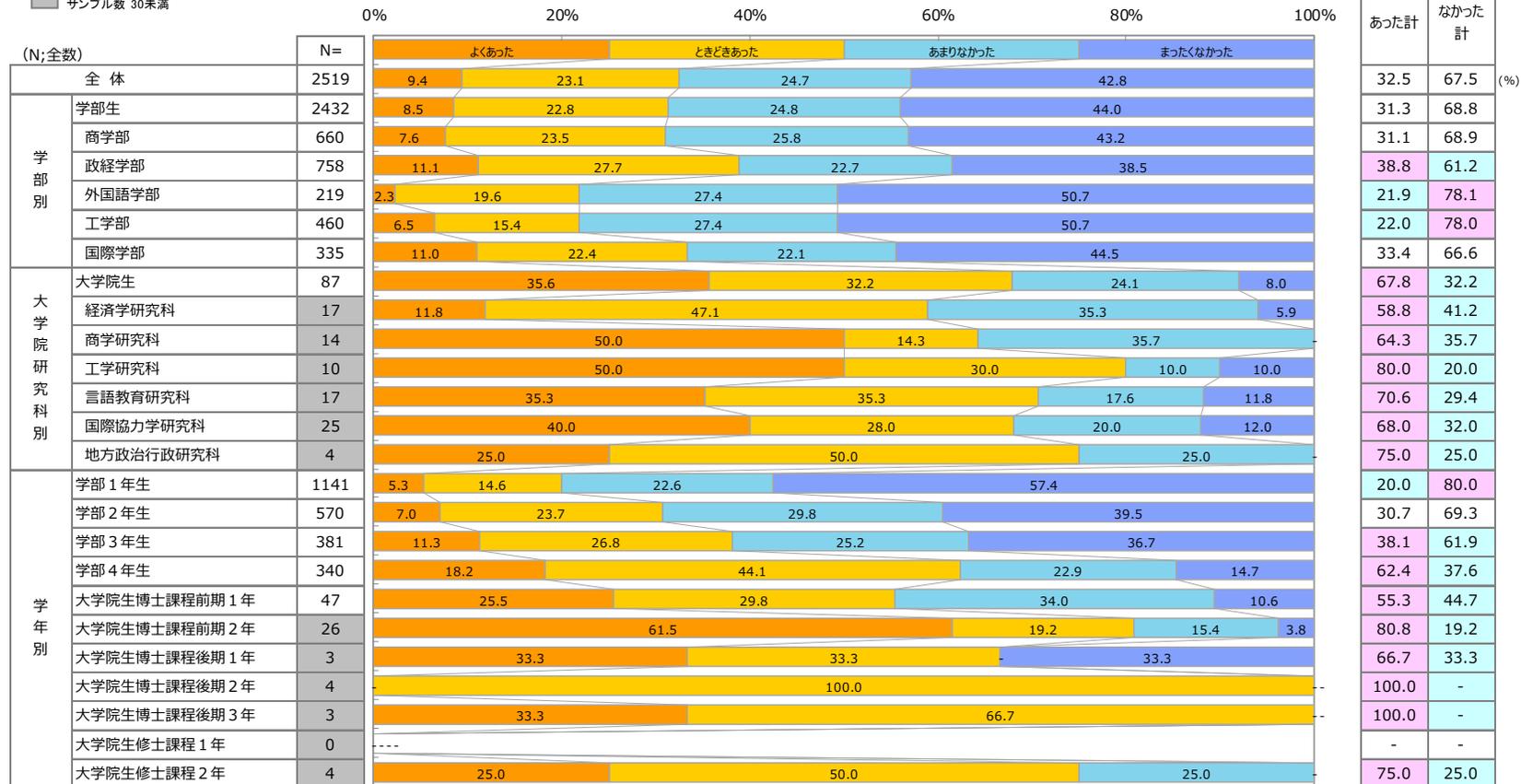
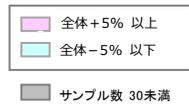
- ・教職員への学修に関する相談経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の31.9%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の68.1%を下回る。
- ・学部別では、学部生は全ての学部で「あった計」が「なかった計」を下回る。「あった計」をみると、学部生では工学部が35.9%で最も高い。大学院生は「あった計」が71.3%と、学部生よりも高い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。



# 授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無

Q14.授業や課題のために図書館で資料・文献を調べたことがありましたか。(SA)

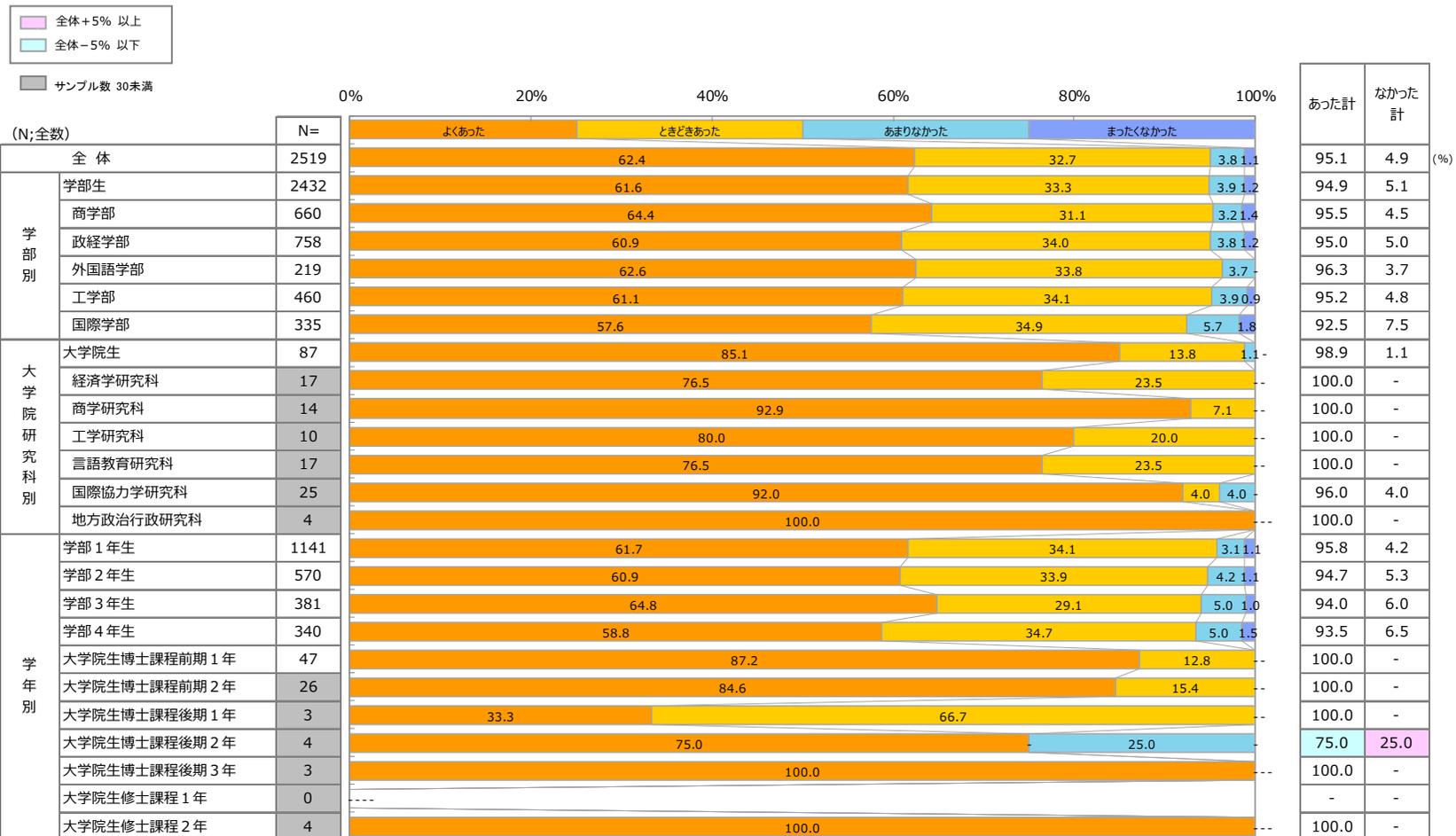
- ・授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の32.5%と「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の67.5%を下回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を下回る。  
「あった計」をみると、学部生では政経学部が38.8%（全体より+6.3pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が67.8%に達する。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。  
学部4年生は「あった計」が62.4%と半数を超えている。



# 授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無

Q15. 授業や課題のためにインターネットで情報を集めたりしたことがありますか。(SA)

- ・ 授業や課題のためインターネットでの情報収集経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の95.1%に達している。
- ・ 各学部をみても「あった計」は90%台と大きな差はみられない。大学院生は「あった計」が98.9%という結果になった。
- ・ 学年別でみると、わずかな差ではあるが、学年が下がるにつれて「あった計」は上がる。

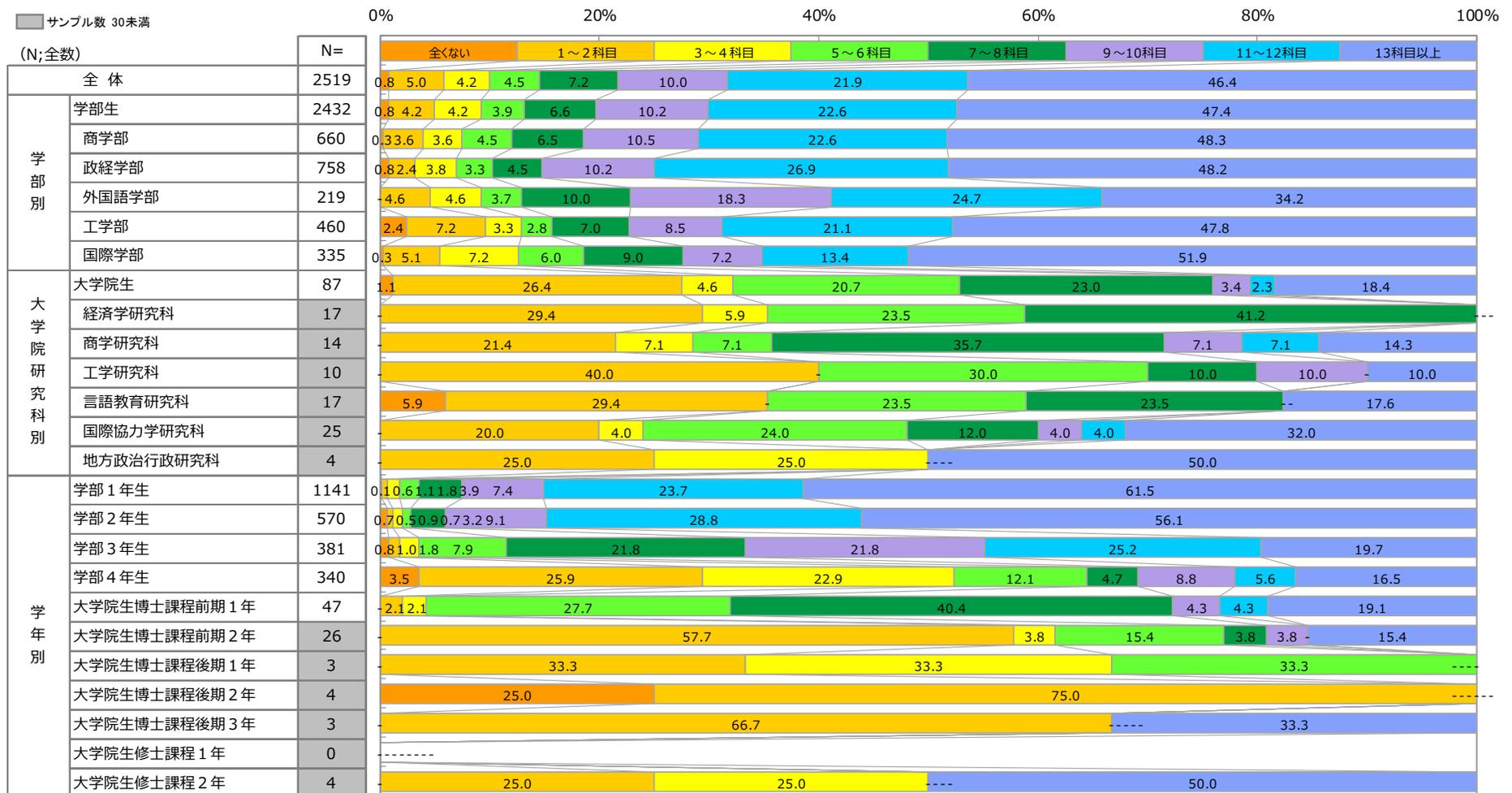


本年度の週当たりの  
学修等時間

# 週当たりの授業出席科目数

Q16.どの程度授業に出席しましたか。(SA)

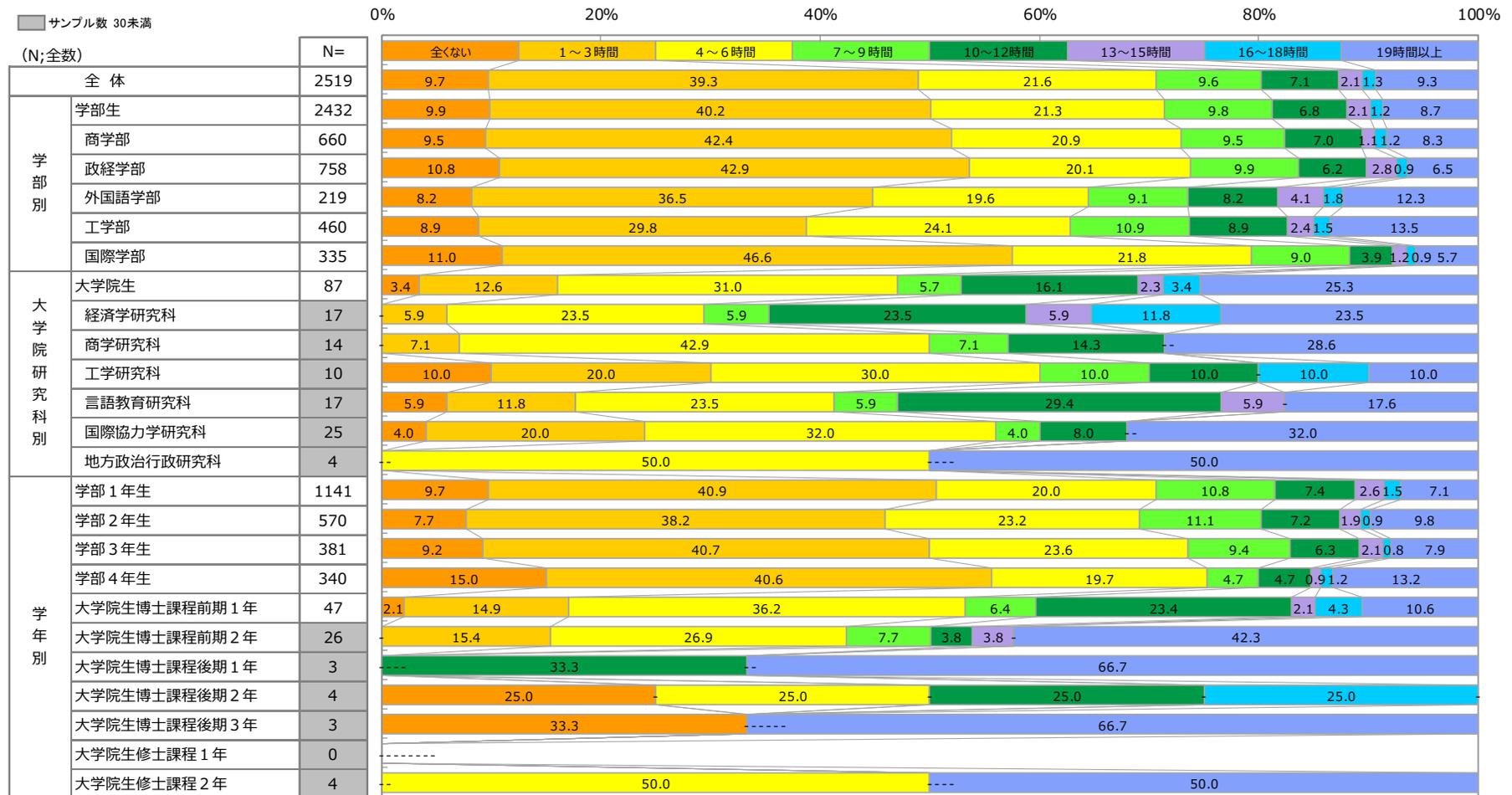
- 週当たりの授業出席科目数は「13科目以上」が全体の46.4%で最も多い。「11～12科目」が21.9%、「9～10科目」が10.0%で続く。
- 学部別では、学部生は全ての学部で「13科目以上」が最も多く、国際学部が51.9%で最も高い。大学院生は「1～2科目」(26.4%)が最も多く、以降、「7～8科目」(23.0%)、「5～6科目」(20.7%)と続く。
- 学年別では、学部1年生、2年生は「13科目以上」が50%以上だが、3年生以降はそのスコア水準が大きく下がる。4年生では「1～2科目」が25.9%で最も多い。



# 週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間

Q17. 授業時間以外に授業と関連した学修や経験をどの程度しましたか。(SA)

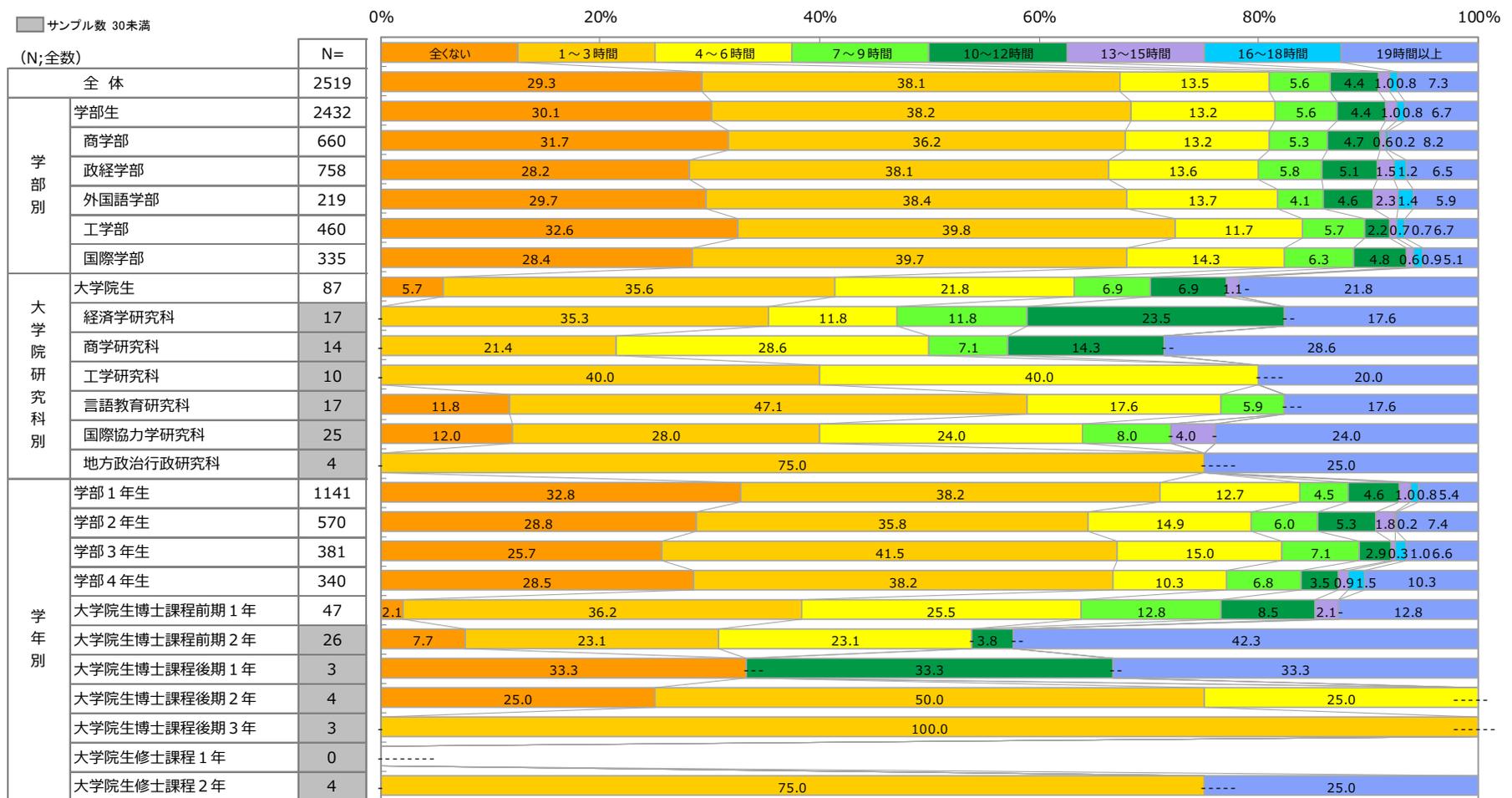
- ・週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間は全体で見ると、「1～3時間」が39.3%で最も多い。以降、「4～6時間」が21.6%、「7～9時間」が9.6%で続く。なお「全くない」は9.7%。
- ・学部別では、学部生は全ての学部で「1～3時間」が最も多く、国際学部が46.6%で最も高い。なお、工学部（13.5%）、外国語学部（12.3%）では「19時間以上」が10%以上。大学院生は「4～6時間」が31.0%で最も多い（全体より+9.4pt）。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「1～3時間」が約40%と最も多い。



# 週当たりの授業と関連しない読書時間

Q18. 授業と関連しない読書をどの程度しましたか（マンガ・雑誌を除く）。（SA）

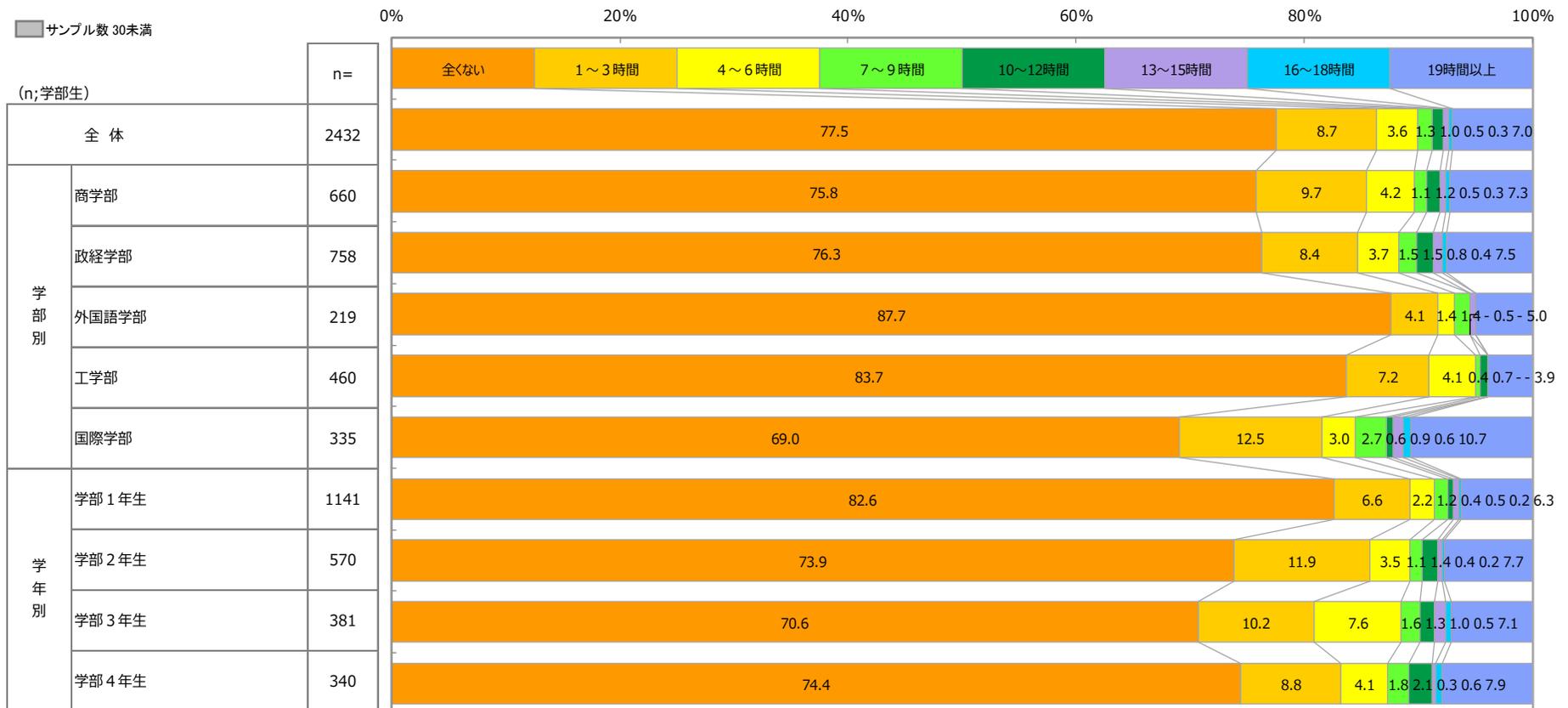
- ・週当たりの授業と関連しない読書時間は全体で見ると、「1～3時間」が38.1%で最も多い。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、政経学部（71.8%）が最も時間を割いており、国際学部（71.6%）が続く。各学部で「1～3時間」は工学部（39.8%）が最も高い。
- ・大学院生は「1～3時間」（35.6%）が最も多く、「4～6時間」、「19時間以上」がともに21.8%と学部生より時間を割いていることが伺える。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「1～3時間」が最も多い。



# 週当たりの部活動・サークル活動参加時間

Q19.どの程度部活動やサークル活動に参加しましたか。(SA)

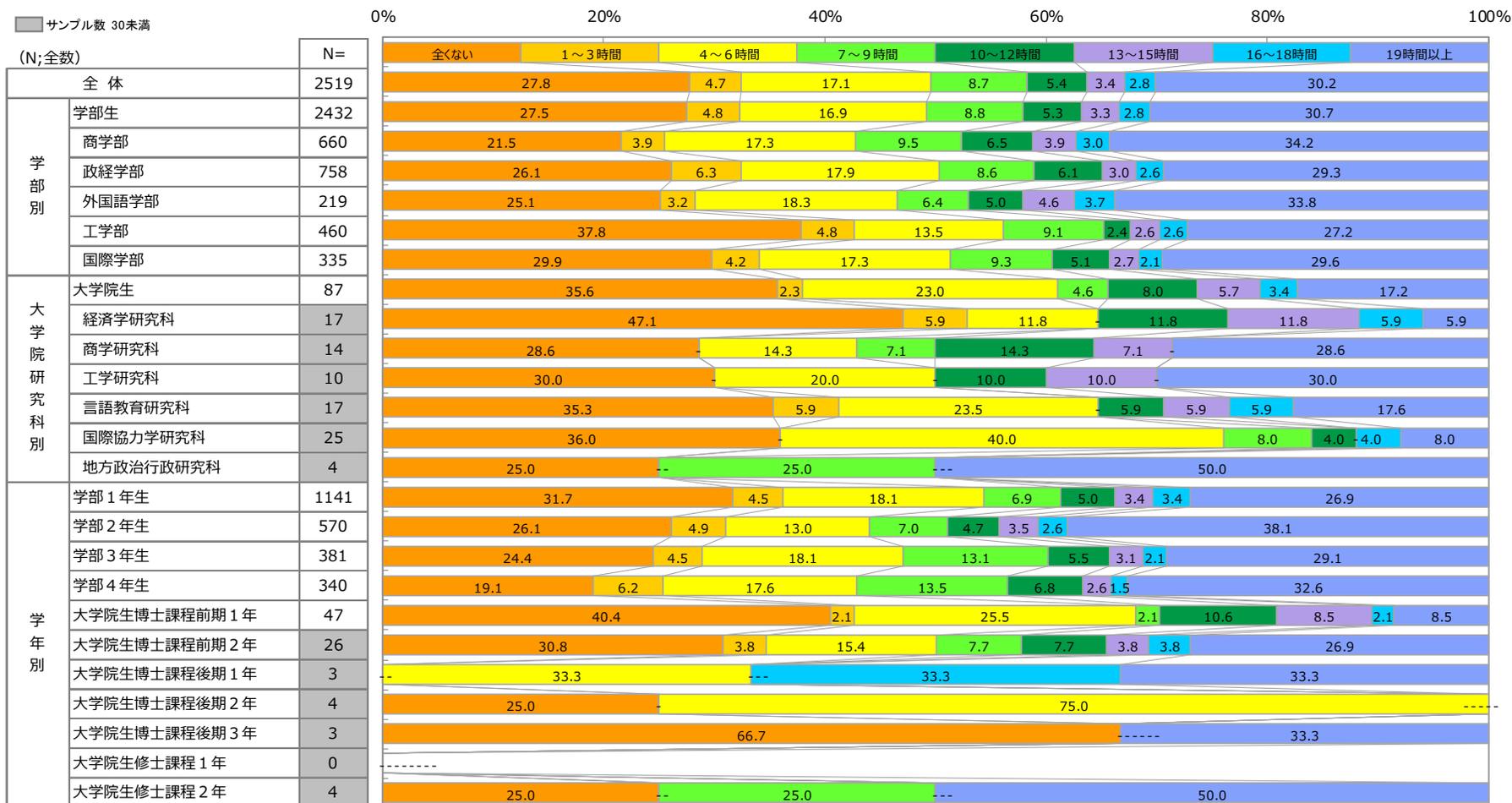
- 学部生の週当たりの部活動・サークル活動参加時間は全体で見ると、「全くない」を除いて、「1～3時間」が8.7%で最も多い。「19時間以上」が7.0%で続く。
- 学部別で、1時間以上の合計をみると、国際学部（31.0%）が最も時間を割いており、商学部（24.2%）が続く。参加時間は「1～3時間」が最も多く、国際学部（12.5%）、商学部（9.7%）、政経学部（8.4%）と続く。外国語学部の1時間以上の合計は12.3%と最も低い。
- 学年別では、3年生の1時間以上の部活動・サークル活動の参加が最も多く（29.4%）、2年生（26.1%）と続く。最も低いのは1年生（17.4%）。



# 週当たりのアルバイト・就労時間

Q20.どの程度アルバイトや仕事をしましたか。(SA)

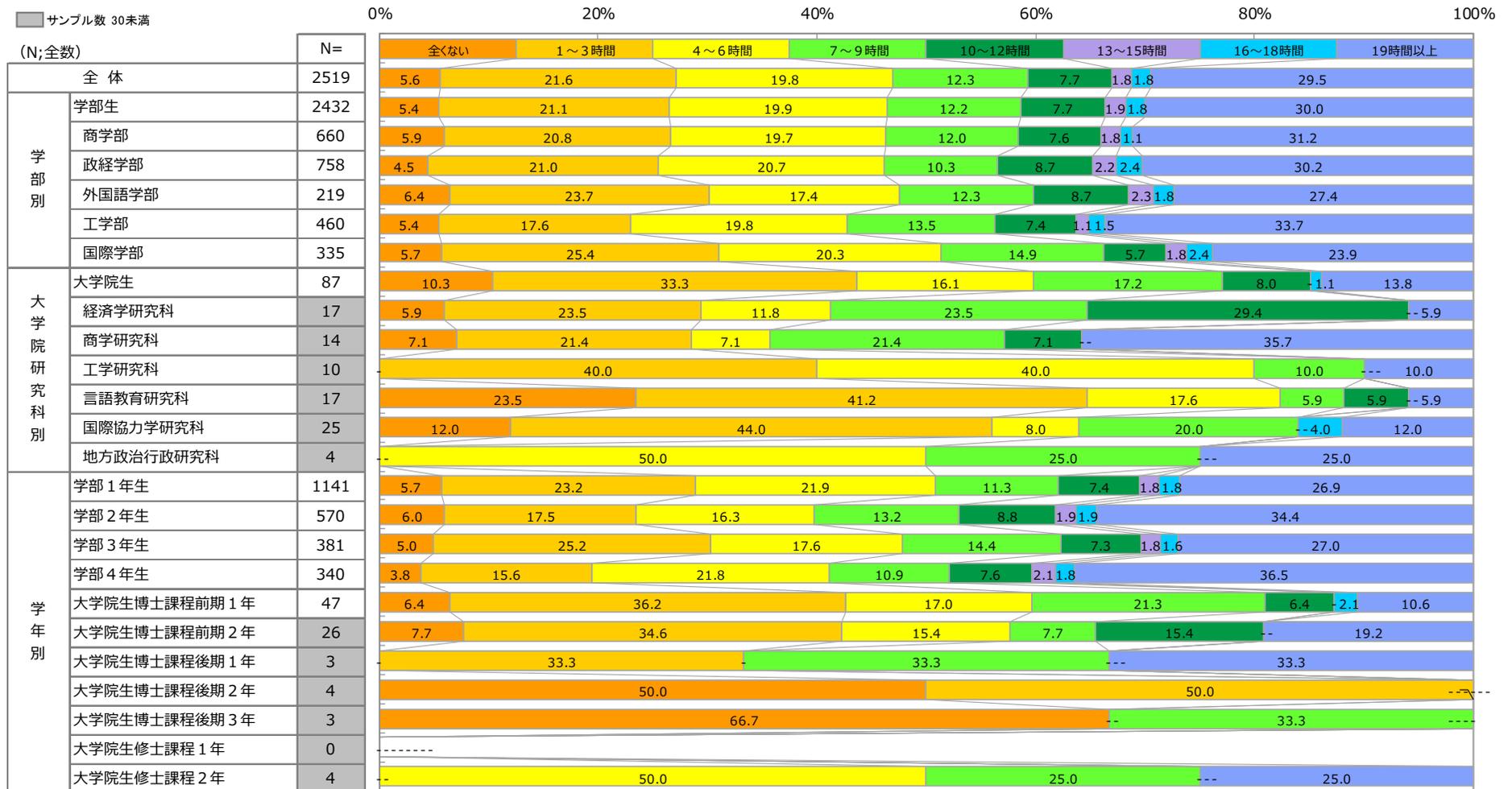
- ・週当たりのアルバイト・就労時間は全体で見ると、「19時間以上」が30.2%で最も多い。「4～6時間」が17.1%、「7～9時間」が8.7%で続く（全くないを除く）。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、商学部（78.5%）が最も時間を割いており、外国語学部（74.9%）、政経学部（73.9%）が続く。  
学部生は全ての学部で全くないを除いて「19時間以上」が最も多く、商学部（34.2%）、外国語学部（33.8%）、国際学部（29.6%）、政経学部（29.3%）、工学部（27.2%）の順で高い。
- ・大学院生は、全くないを除いて「4～6時間」が23.0%で最も多い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも、全くないを除いて「19時間以上」が最も多い。



# 週当たりの個人的な趣味活動時間

Q21.どの程度個人的な趣味活動をしましたか。(SA)

- ・週当たりの個人的な趣味活動時間は全体で見ると、「19時間以上」が29.5%で最も多い。「1～3時間」が21.6%、「4～6時間」が19.8%、「7～9時間」が12.3%で続く。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、学部間での差はさほどない（いずれも90%台）。学部生は国際学部では「1～3時間」が25.4%で最も多く、他の学部では「19時間以上」が最も多い。大学院生は「1～3時間」が33.3%で最も多い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「19時間以上」が最も多い。

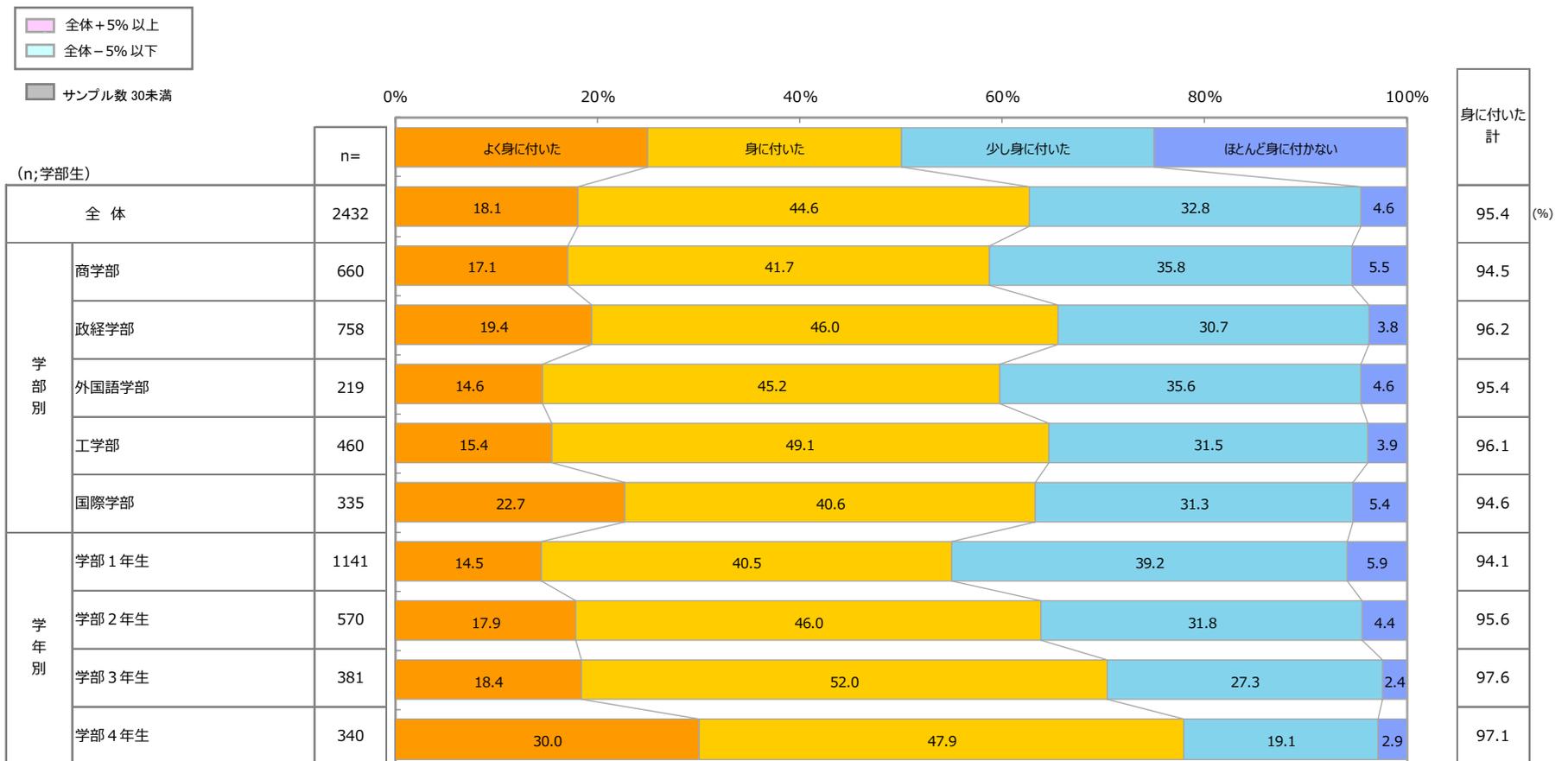


入学時と比べ、身に付いた  
学修成果・経験

# 一般的な教養

Q22.一般的な教養が身に付きましたか。(SA)

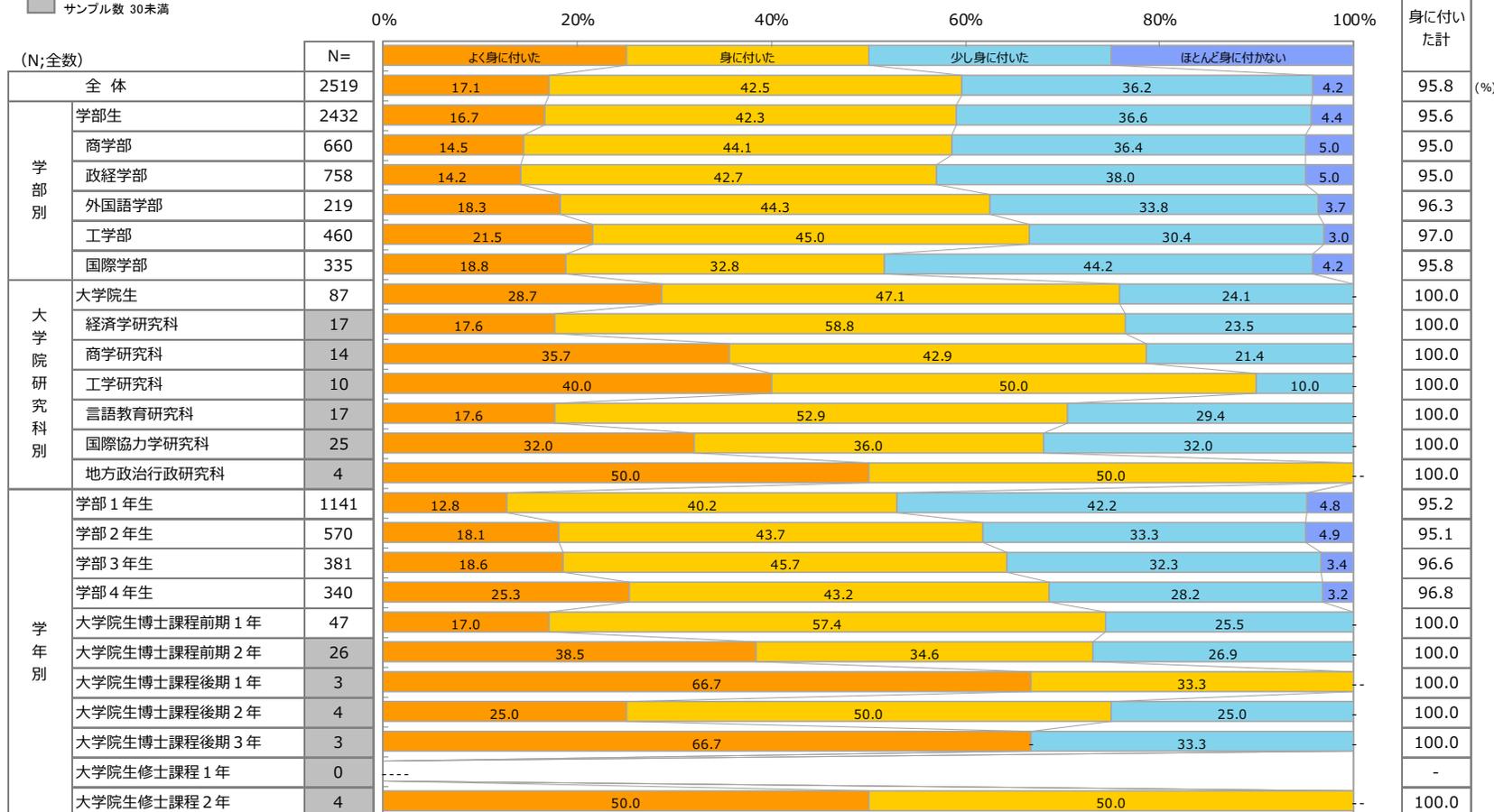
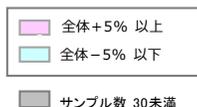
- 学部生の一般的な教養の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の95.4%に達し、「よく身に付いた」は18.1%となった。
- 学部別では、各学部で「身に付いた計」が概ね95%以上。  
「よく身に付いた」をみると、国際学部が22.7%で最も高く、政経学部が19.4%、商学部が17.1%と続く。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



# 専門分野に関する知識・技能

Q23. 専門分野に関する知識・技能が身に付きましたか。  
(SA)

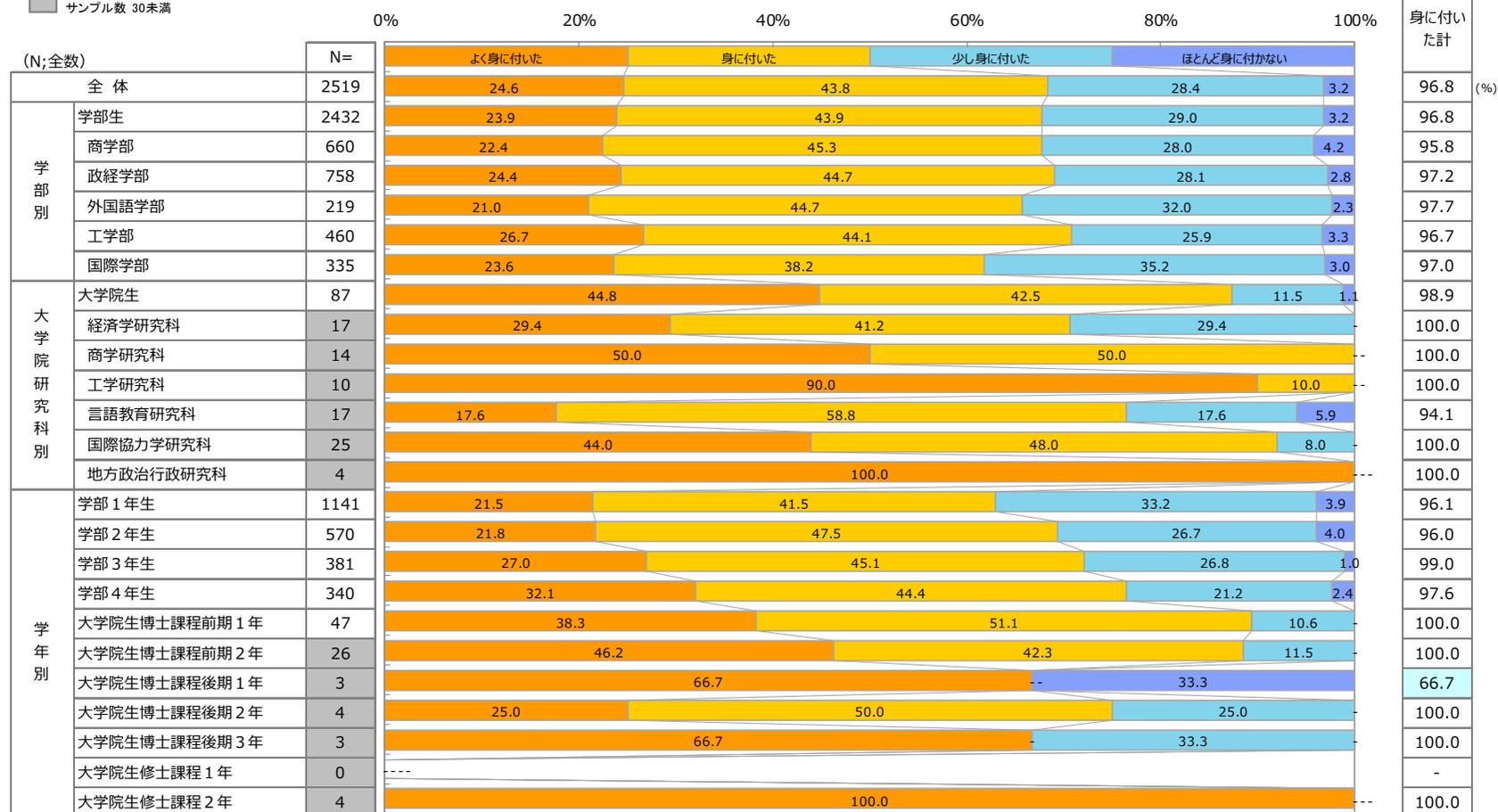
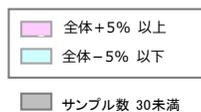
- ・ 専門分野に関する知識・技能の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の95.8%に達し、「よく身に付いた」は17.1%となった。
- ・ 学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。  
「よく身に付いた」をみると、学部生では工学部（21.5%）が最も高い。  
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が28.7%となった。
- ・ 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



# 情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力

Q24.情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力は身に付きましたか。(SA)

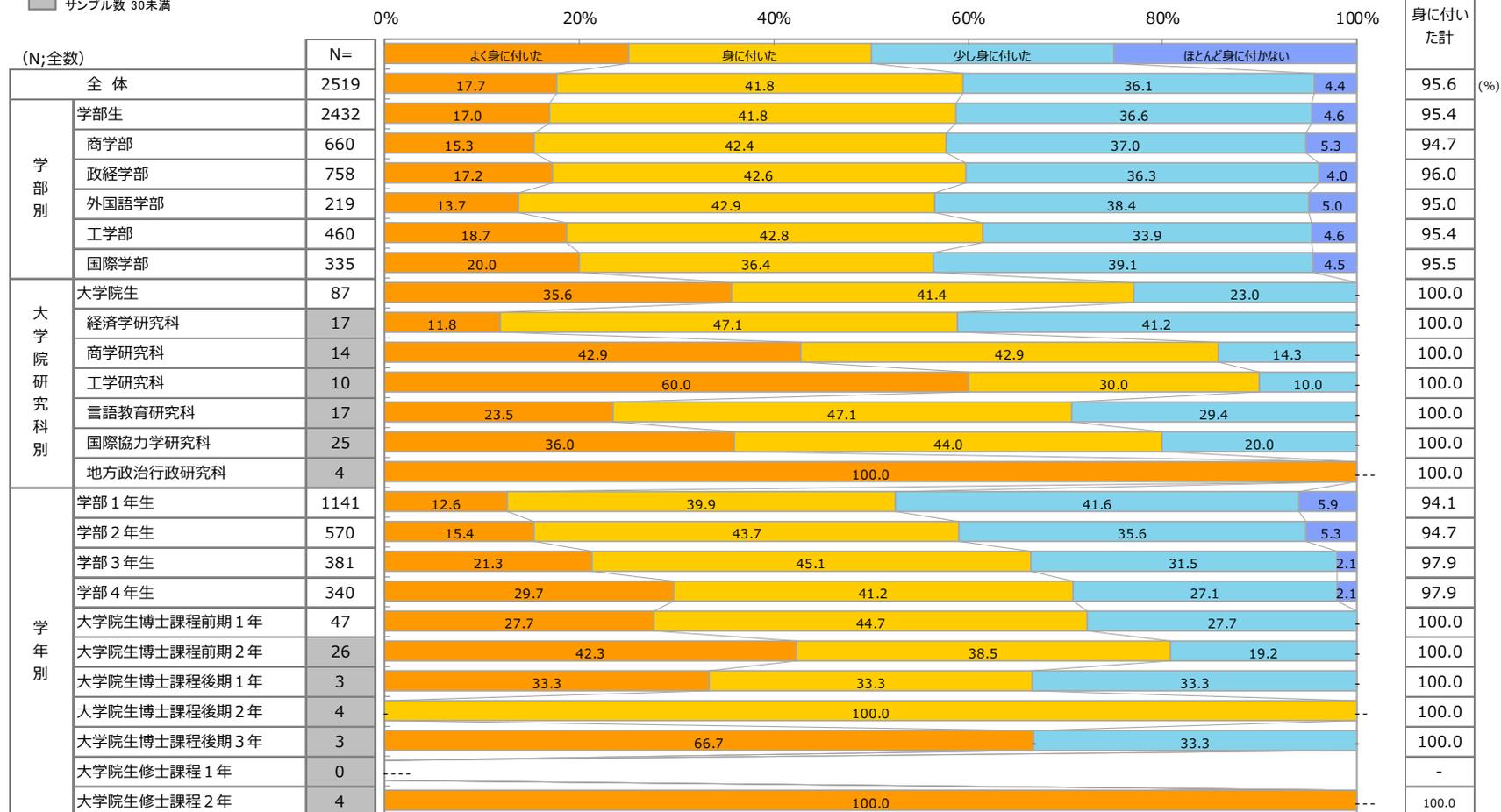
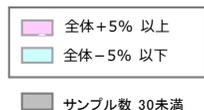
- ・情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の96.8%に達し、「よく身に付いた」は24.6%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上で、「よく身に付いた」はいずれも20%以上。大学院生は「身に付いた計」が98.9%に達し、「よく身に付いた」が44.8%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



# 物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力

Q25.物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力は身に付きましたか。(SA)

- ・物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の95.6%に達し、「よく身に付いた」は17.7%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が概ね95%以上で、「よく身に付いた」は国際学部が20.0%で最も高く、工学部が18.7%と続く。  
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が35.6%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



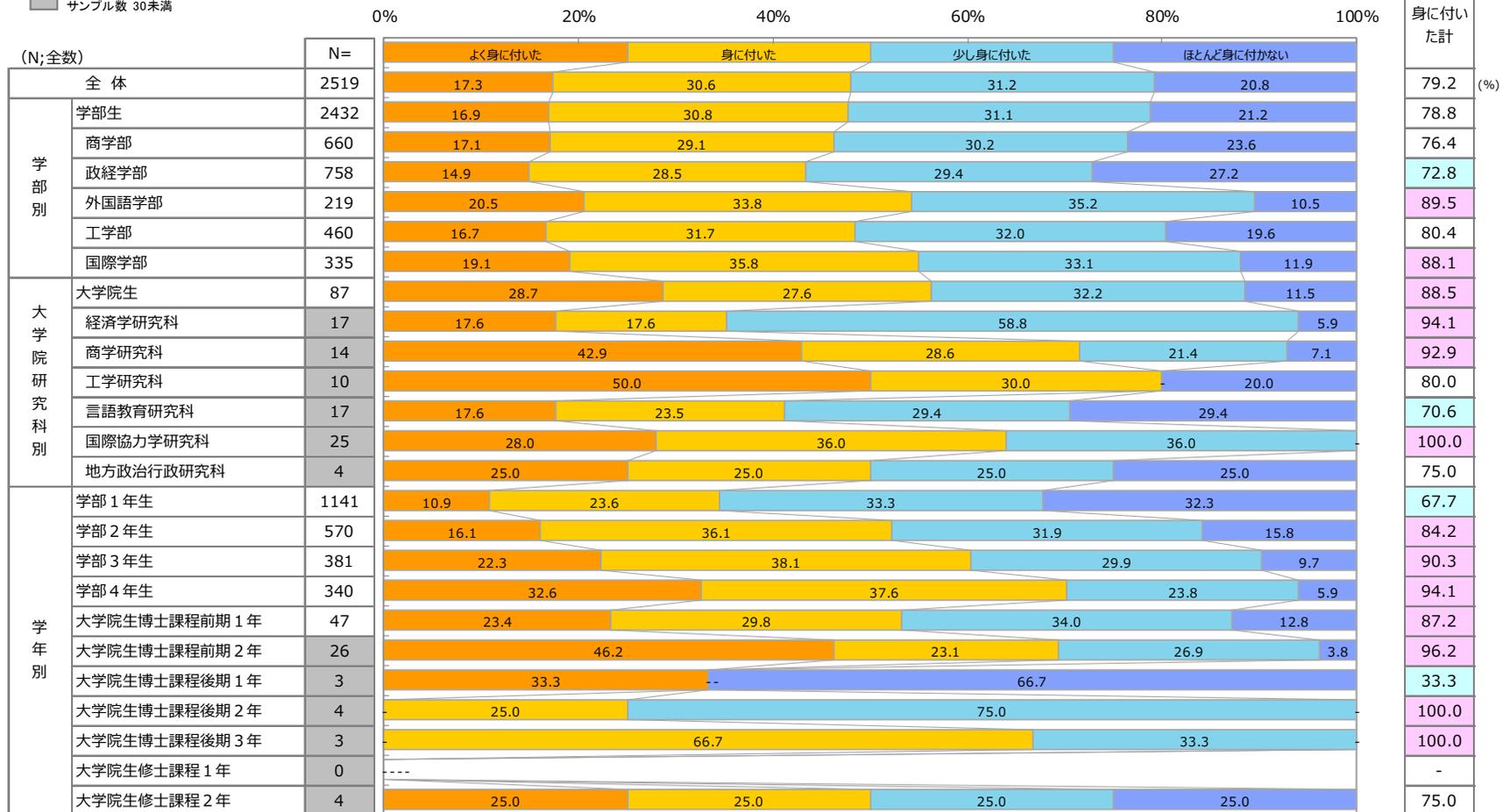
# 他の人と協力して物事を進めていく力

Q26.他の人と協力して物事を進めていく力は身に付きましたか。(SA)

- ・他の人と協力して物事を進めていく力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の79.2%に達し、「よく身に付いた」は17.3%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は外国語学部（89.5%）、国際学部（88.1%）が特に高い。政経学部は72.8%で最も低い。大学院生は「身に付いた計」が88.5%に達し、「よく身に付いた」が28.7%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



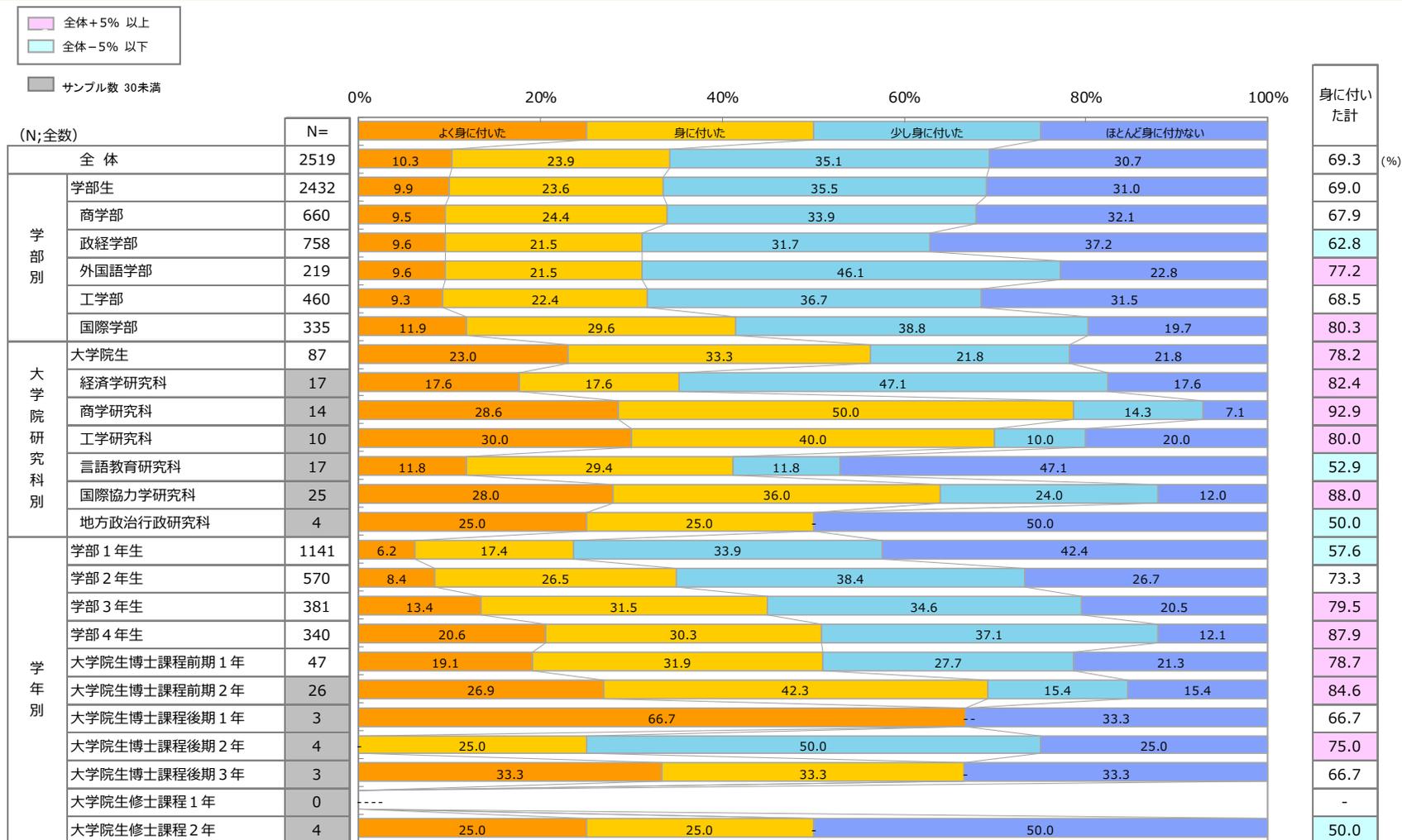
■ サンプル数 30未満



# 必要な場合のリーダーシップを発揮できる力

Q27.必要な場合のリーダーシップを発揮できる力は身に付きましたか。(SA)

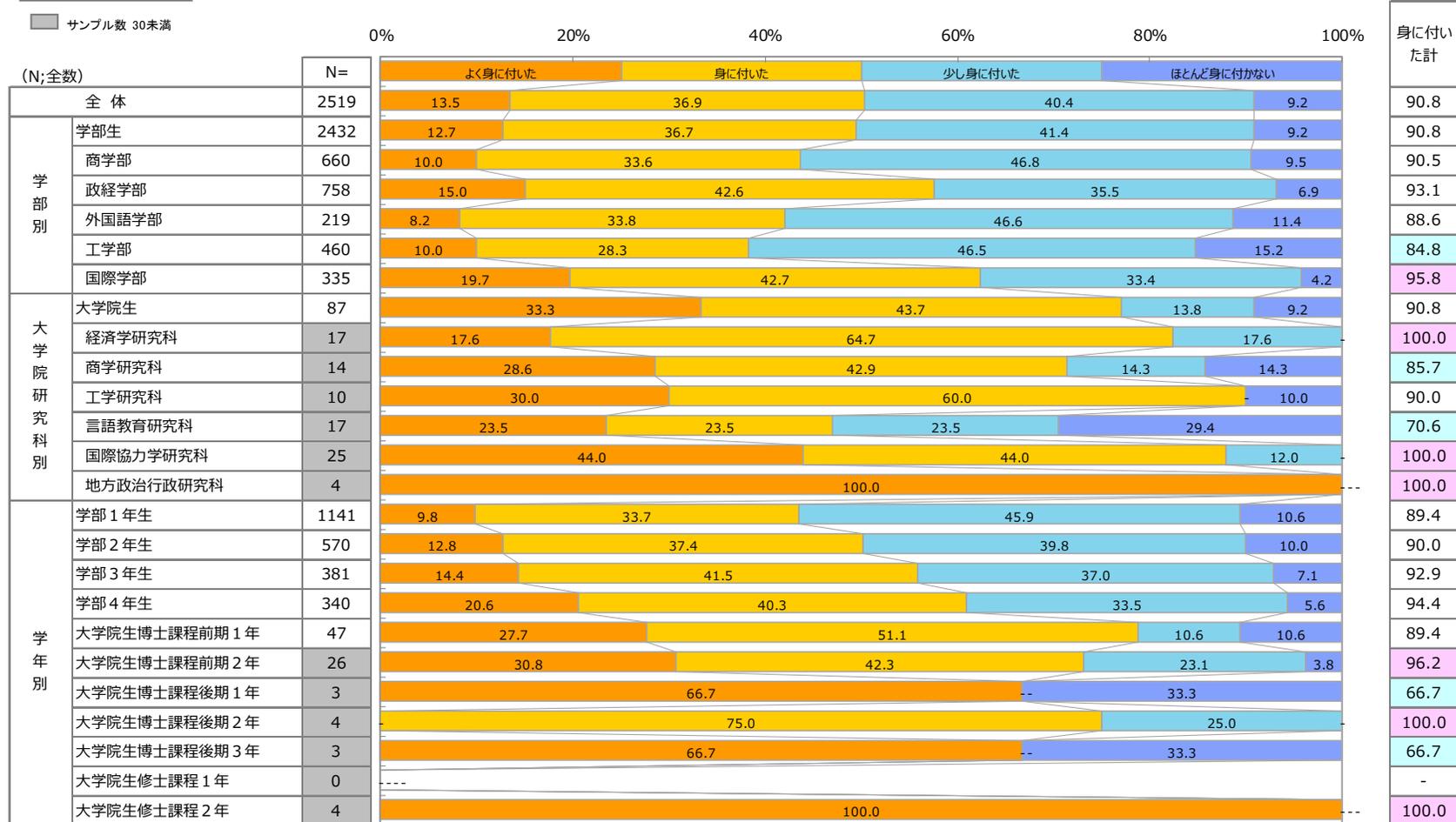
- 必要な場合のリーダーシップを発揮できる力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の69.3%に達し、「よく身に付いた」は10.3%となった。
- 学部別では、「身に付いた計」は国際学部（80.3%）が最も高く、外国語学部（77.2%）と続く。政経学部は62.8%と最も低い。「よく身に付いた」をみると、各学部で10%程度のスコア水準。大学院生は「身に付いた計」が78.2%に達し、「よく身に付いた」は23.0%。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



# 社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力

Q28.社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力は身に付きましたか。(SA)

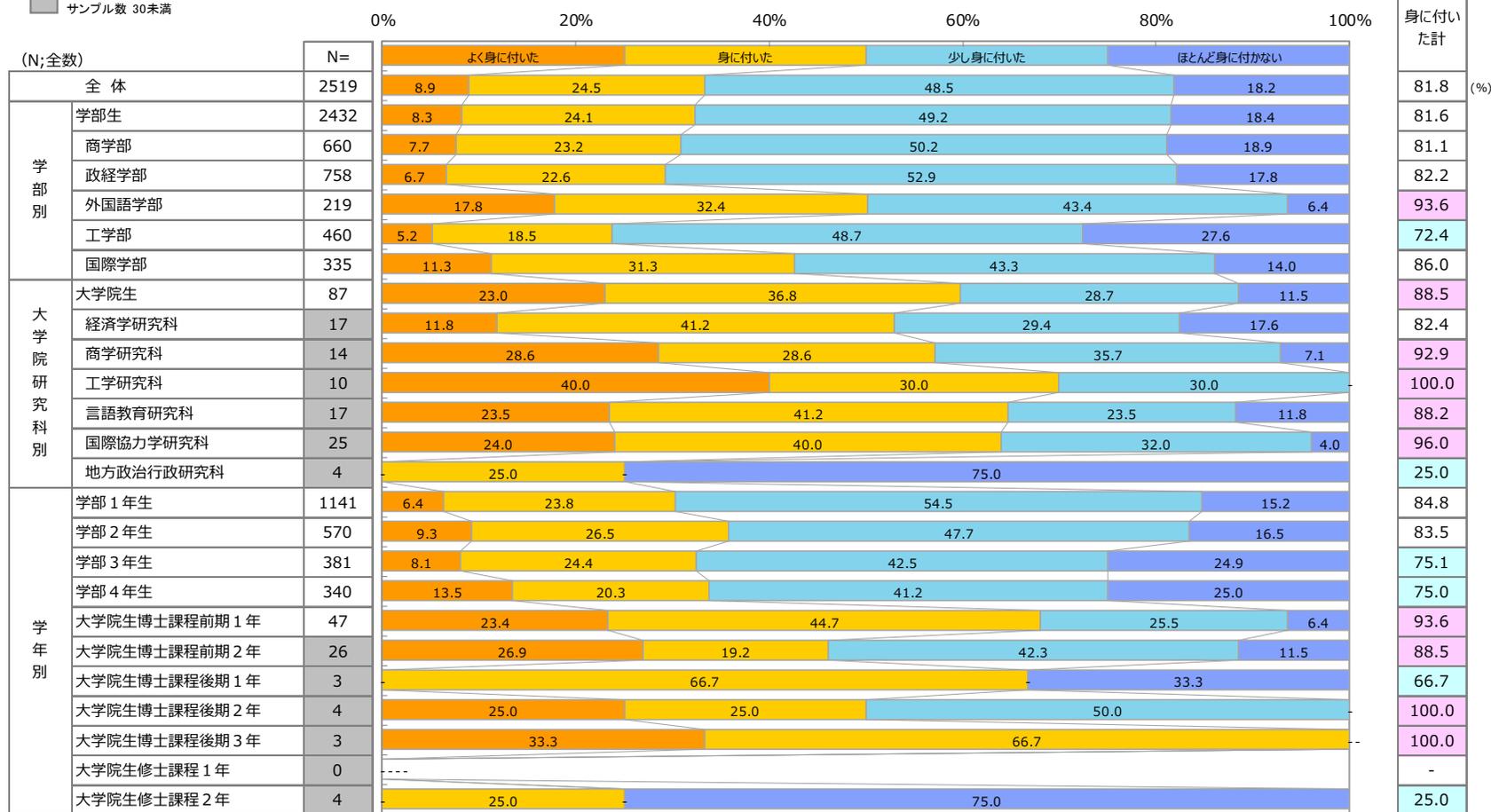
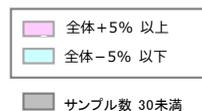
- ・社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力の「身に付いた計(よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた)」は全体の90.8%に達し、「よく身に付いた」は13.5%となった。
- ・学部別では、国際学部で「身に付いた計」が95.8%と最も高く、政経学部が93.1%と続く。「よく身に付いた」をみると、学部生では国際学部が19.7%と最も高い。大学院生は「身に付いた計」が90.8%で、「よく身に付いた」が33.3%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



# 外国語の運用能力

Q29.外国語の運用能力は身に付きましたか。(SA)

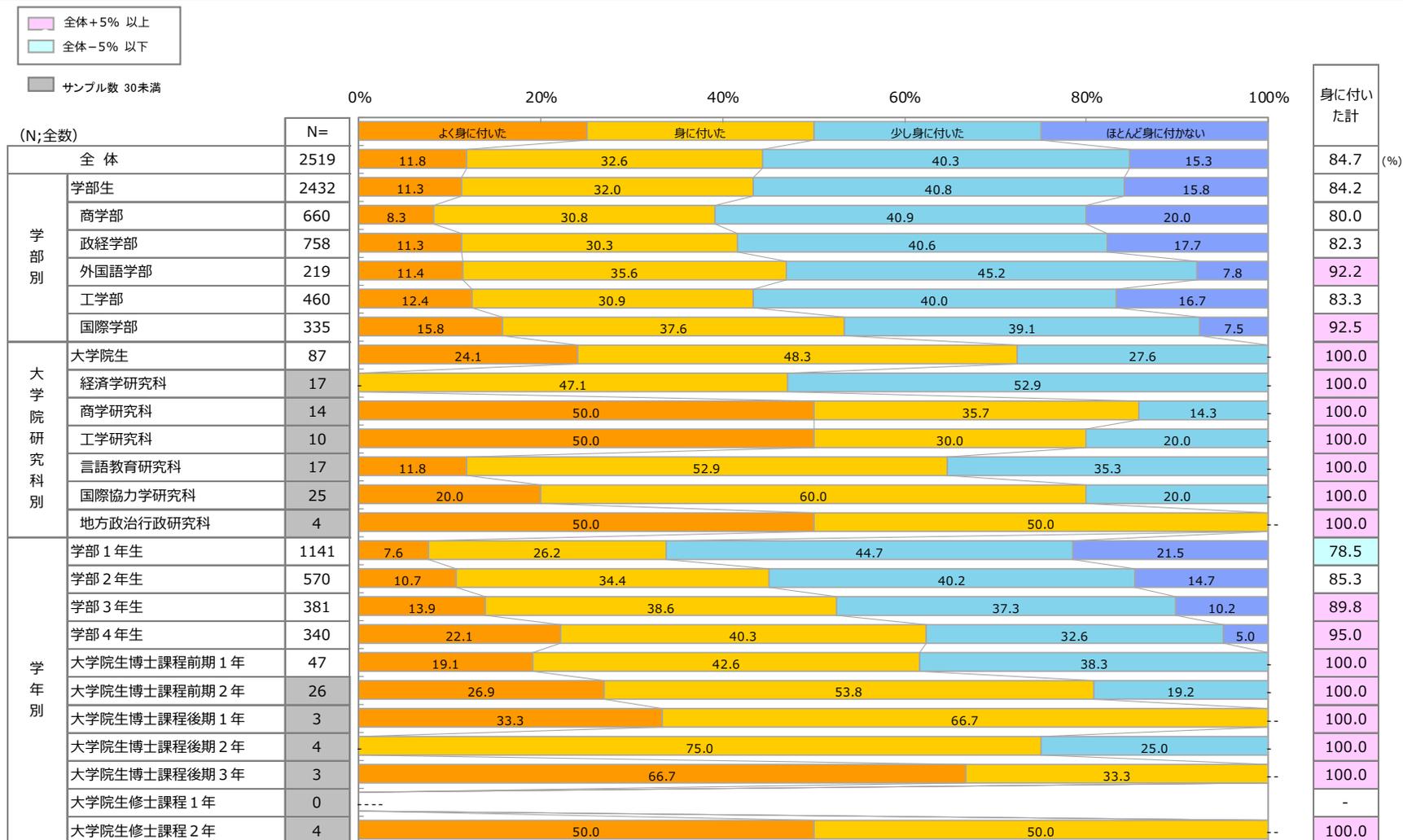
- ・外国語の運用能力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の81.8%となり、「よく身に付いた」は8.9%となった。
- ・学部別では、外国語学部で「身に付いた計」が93.6%に達し、国際学部が86.0%で続く。「よく身に付いた」をみると、外国語学部で17.8%と特に高い。大学院生は「身に付いた計」が88.5%で、「よく身に付いた」が23.0%となった。
- ・学年別では、「よく身に付いた」は学部生の中では4年生が13.5%と最も高い。



# 学修した内容をまとめて、それを発表する力

Q30.学修した内容をまとめて、それを発表する力は身に付きましたか。(SA)

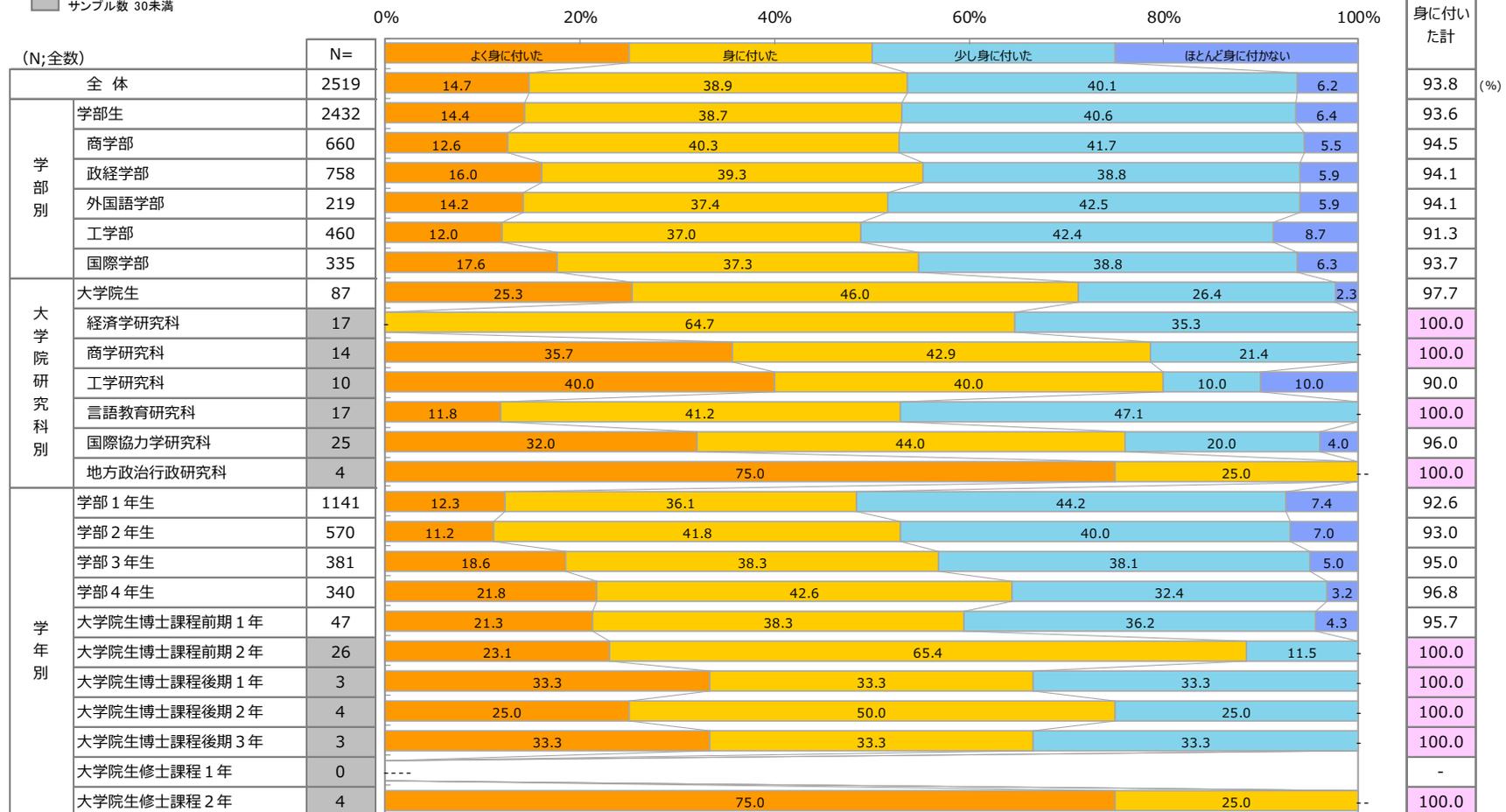
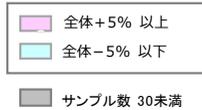
- 学修した内容をまとめて、それを発表する力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の84.7%に達し、「よく身に付いた」は11.8%となった。
- 学部別では、「身に付いた計」は国際学部（92.5%）、外国語学部（92.2%）で90%以上。「よく身に付いた」をみると、学部生では国際学部が15.8%と最も高い。大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が24.1%となった。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



# 表現すべき内容を文章にして書ける力

Q31.表現すべき内容を文章にして書ける力は身に付きましたか。(SA)

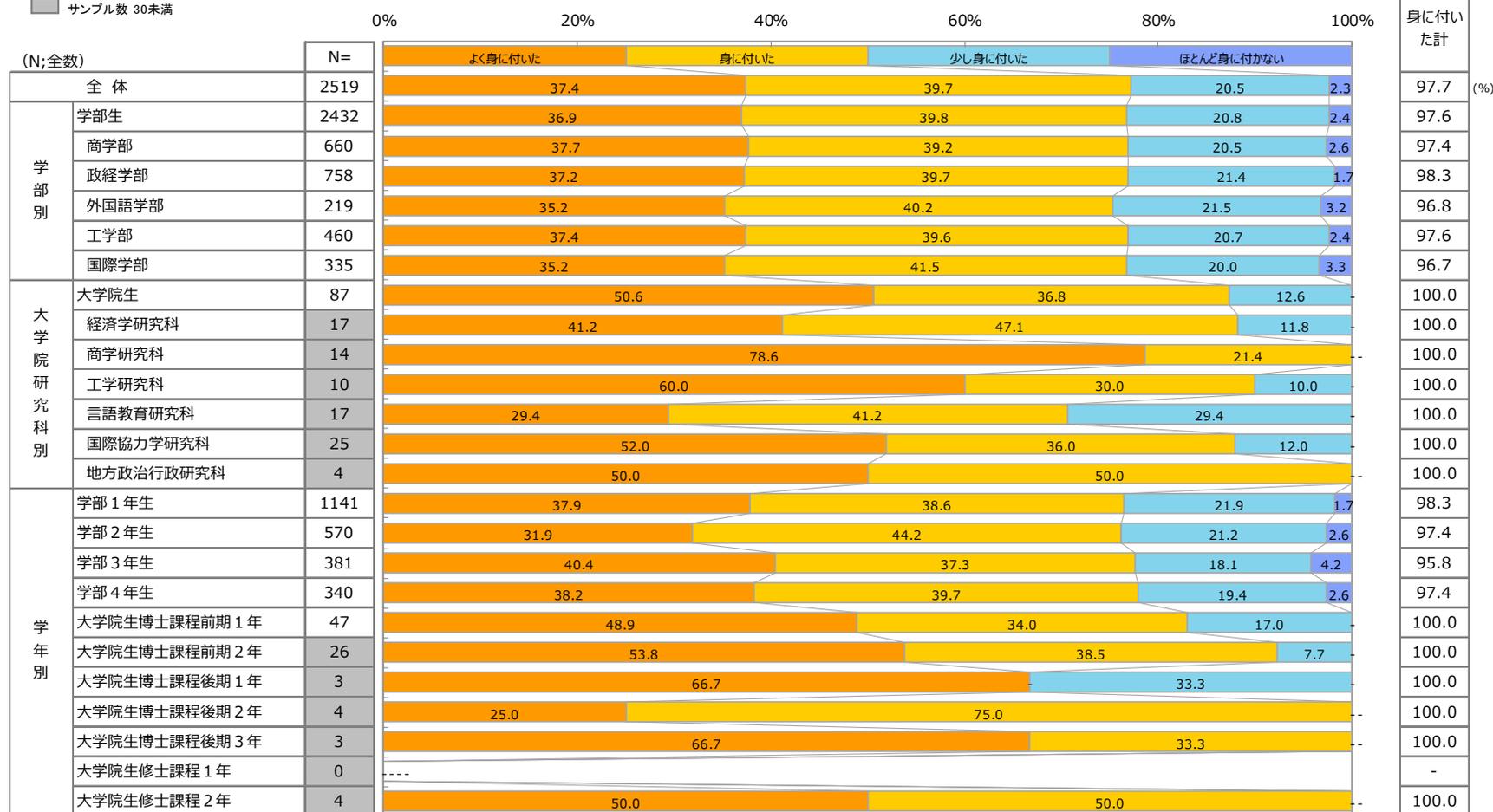
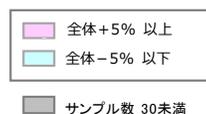
- ・表現すべき内容を文章にして書ける力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の93.8%に達し、「よく身に付いた」は14.7%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は、すべての学部で90%以上。  
「よく身に付いた」をみると、学部生では国際学部が17.6%と最も高い。  
大学院生は「身に付いた計」が97.7%で「よく身に付いた」が25.3%となった。
- ・学年別で「よく身に付いた」をみると、学部4年生は21.8%で最も高く、続くのは3年生の18.6%となった。



# パソコンで文書や資料を作成する力

Q32.パソコンで文書や資料を作成する力は身に付きましたか。(SA)

- ・パソコンで文書や資料を作成する力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の97.7%に達し、「よく身に付いた」は37.4%となった。
- ・学部別では、どの学部でも「身に付いた計」が95%以上。  
「よく身に付いた」をみると、各学部で35%以上のスコア水準。  
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が50.6%となった。
- ・学年別では、学部3年生が40.4%で最も高い。

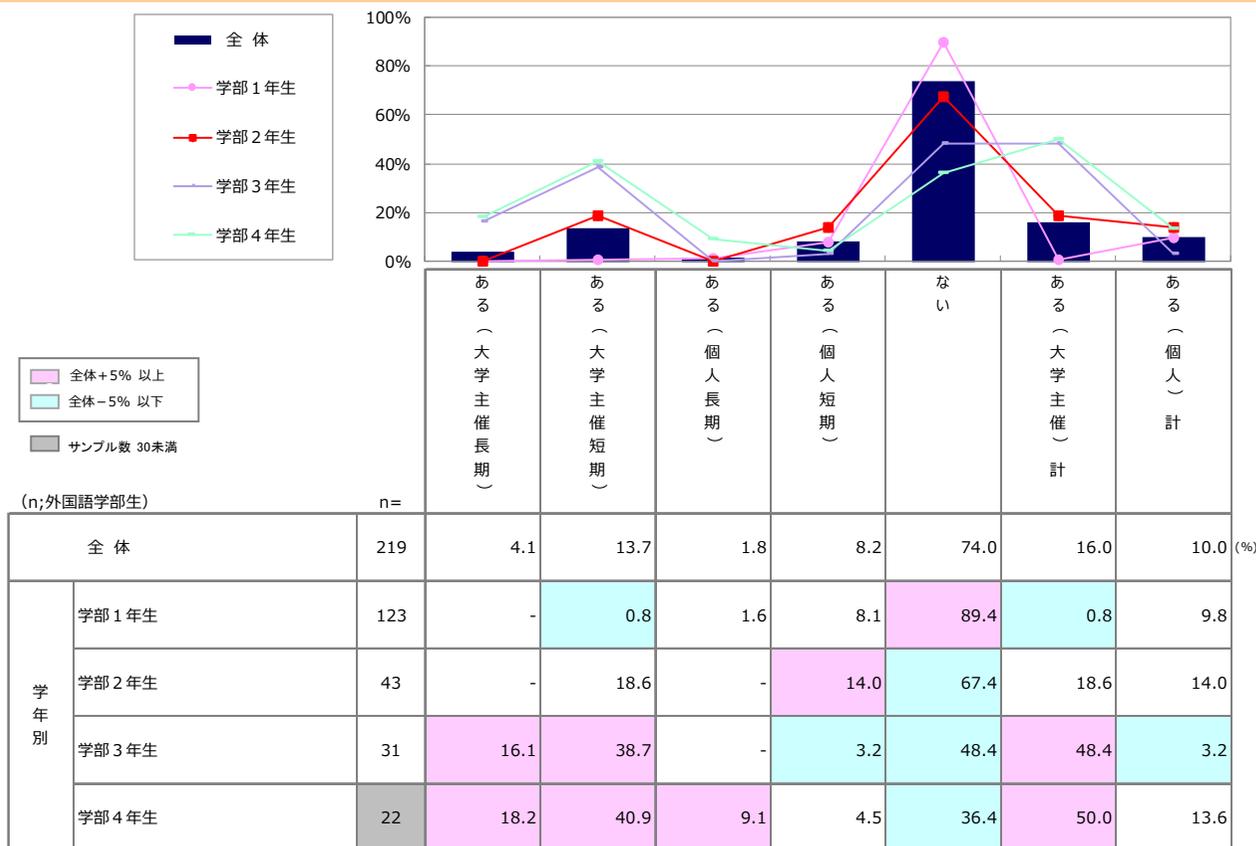


# 学部設問項目

# 海外での語学研修経験

Q33.海外で語学研修をしたことがありますか（入学以来本年度3月までの実施予定も含む）。（MA）  
 (外国語学部生のみ)

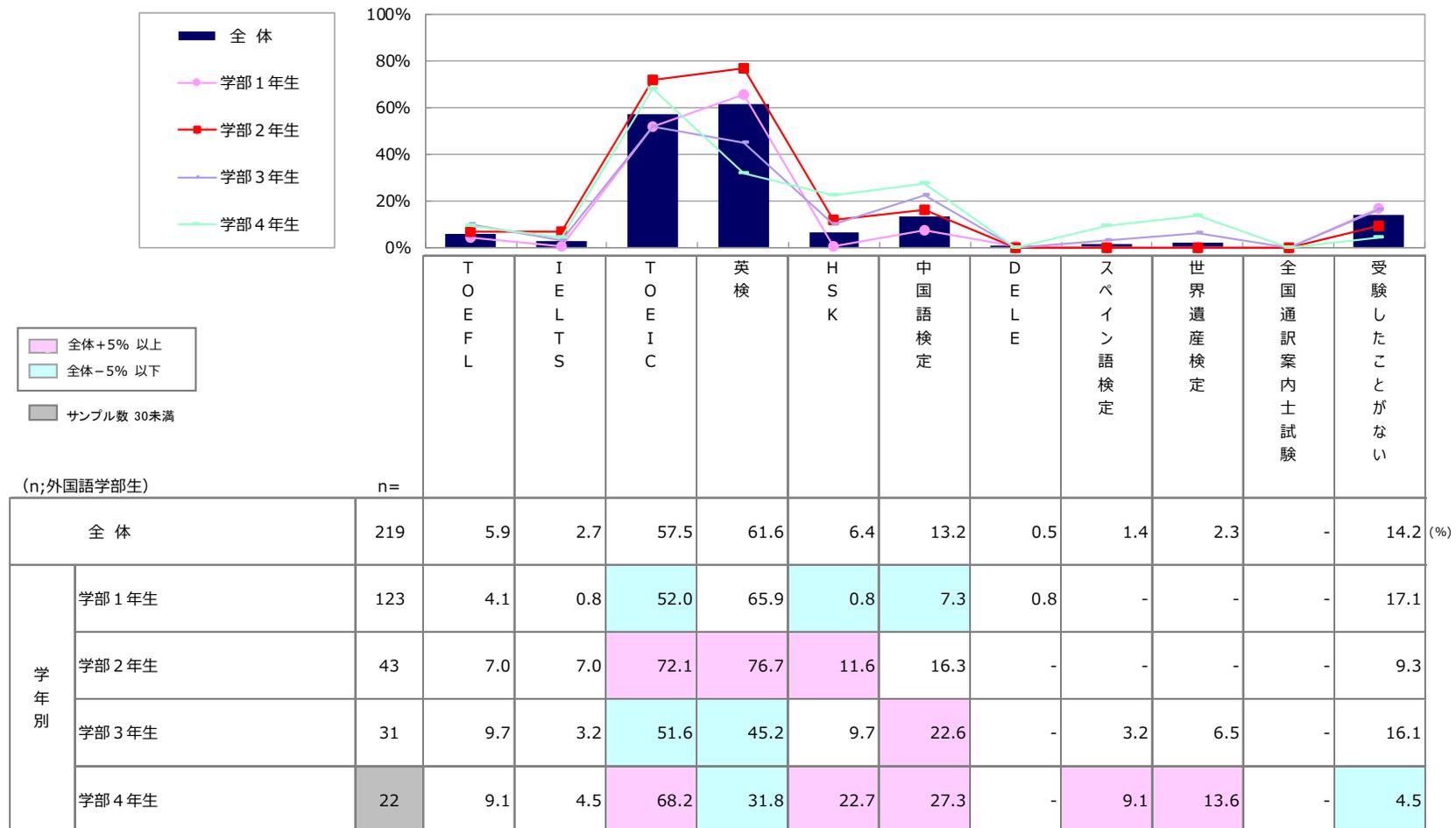
- ・外国語学部生の海外での語学研修経験は「ない」が74.0%。  
 「ある（大学主催）」計は16.0%と「ある（個人）」計（10.0%）を上回る。
- ・学年別では、1年生は「ある（個人短期）」（8.1%）が最も高い。  
 長期の語学研修経験は「大学主催」は0%、「個人」は1.6%。語学研修経験としては、長期より短期の割合が高い。  
 2年生は「ある（大学主催短期）」（18.6%）が最も高く、「ある（個人短期）」（14.0%）が続く。  
 長期の語学研修経験は「大学主催」「個人」ともに0%。語学研修経験としては、短期のみ。  
 3年生は「ある（大学主催長期）」（16.1%）、「ある（大学主催短期）」（38.7%）と、大学主催の語学研修経験の方が個人の語学研修経験よりも高い。  
 4年生も「ある（大学主催長期）」（18.2%）、「ある（大学主催短期）」（40.9%）と、大学主催の語学研修経験の方が個人の語学研修経験よりも高い。



# 語学検定試験受検有無

Q34.語学に関する検定試験を受検したことがありますか。  
 (MA) (外国語学部生のみ)  
 ※以下の検定試験を受検したことがない方は、何もチェックせずに、次に進んでください。

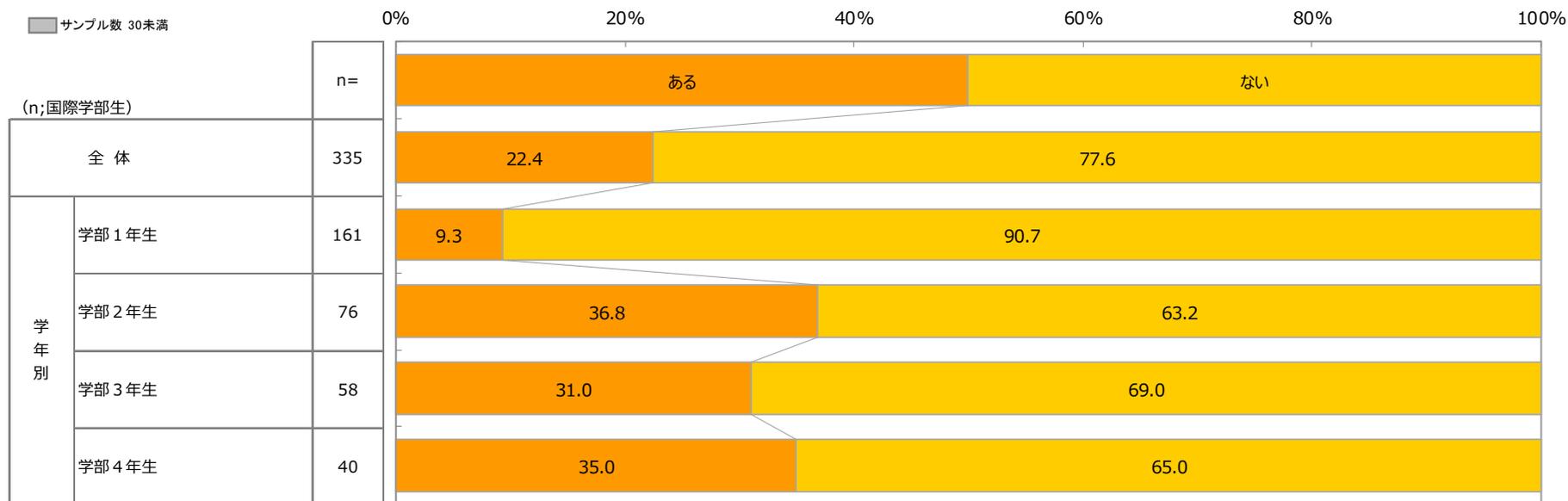
- ・ 受検経験がある語学検定試験は「英検」61.6%、「TOEIC」57.5%と英語の検定が上位にあがり、「中国語検定」が13.2%で続く。
- ・ 学年別でみると、「TOEIC」は2年生が72.1%と最も高く、3年生が51.6%と最も低い。「英検」は2年生が76.7%と最も高く、4年生が31.8%と最も低い。
- ・ 「中国語検定」は学年が上がるにつれ、受検経験率も上がる傾向。



# 国内、国外におけるボランティア・NGO活動参加有無

Q35.入学以来、国内、国外におけるボランティア活動やNGO活動に参加したことがありますか。(SA)  
 (国際学部生のみ)

- ・国際学部生の国内、国外におけるボランティア・NGO活動参加経験は「ある」が22.4%。
- ・学年別に参加経験率をみると、2年生が36.8%（全体より+14.4pt）で最も高い。



# 学修行動調査結果 に対する所見

# 大学全体

## はじめに

本年度は、新型コロナウイルス感染症の対応として、授業形態については遠隔授業を中心に実施した。また、一時的ではあるが図書館の閉館、部活動・サークルの活動自粛などを行っており、例年とは異なる環境であった。そのため、調査結果においても例年とは異なる傾向が現れている。

## 1. 本年度の授業の中での経験について

「教材・課題の受け取りや提出にBlackboard、E-mail等を活用」(学部98.2%、院94.3%)は前年度と比べ10%以上増加している。「定期的な小テスト・レポート」(学部97.9%、院89.7%)、「教員への質問」(学部62.0%、院95.4%)、「自分の考えや課題を発表」(学部75.7%、院97.7%)はほぼ例年並み。一方、「学生同士が議論する授業」(学部59.1%、79.3%)、「演習、実験、実習、フィールドワークなどの体験授業」(学部38.4%、院58.6%)は10%以上減少している。これは、学部、大学院ともに同じ傾向である。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「授業や課題のためにインターネットの活用」(学部94.9%、院98.9%)、「教職員への学修に関する相談経験」(学部30.5%、院71.3%)はほぼ例年並みであるが学部における教職員への学修に関する相談経験がここ2年間30%台と低い値になっている。「図書館の活用」(学部31.3%、院67.8%)は学部では約30%、大学院では約17%減少している。また、「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」(学部51.5%、院65.5%)は学部、大学院ともに20%以上減少している。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

学部では「週当たりの授業出席科目数」が「13科目以上」(47.4%)と多くの授業に出席しているが、「授業時間以外の勉強時間」は「1～3時間」(40.2%)、「4～6時間」(21.3%)となっている。「部活動・サークル活動参加」は「全くない」(77.5%)が大幅に増加している。大学院では、「授業出席科目数」は、「1～2科目」(26.4%)、「7～8科目」(23.0%)、「3～4科目」(20.7%)で、「授業時間以外の勉強時間」は「4～6時間」(31.0%)、「19時間以上」(25.3%)で二極化されている。また、学部、大学院ともに「アルバイトの時間」は「全くない」が増加、「19時間以上」が減少している。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

学部では、「コンピュータ活用能力」(97.6%)、「情報収集能力」(96.8%)、「専門知識・技能」(95.6%)、「一般的な教養」(95.4%)、「課題発見・解決能力」(95.4%)、「文章表現能力」(93.6%)、「社会が直面する課題を理解する力」(90.8%)、「プレゼンテーション能力」(84.2%)、「外国語運用能力」(81.6%)は、ほぼ例年並みであるが、「協働性」(78.8%)、「リーダーシップ能力」(69.0%)は、約15%減少している。大学院では、「コンピュータ活用能力」(100%)、「専門知識・技能」(100%)、「課題発見・解決能力」(100%)、「プレゼンテーション能力」(100%)、「情報収集能力」(98.9%)、「文章表現能力」(97.7%)、「社会が直面する課題を理解する力」(90.8%)、「外国語運用能力」(88.5%)、「協働性」(88.5%)、「リーダーシップ能力」(78.2%)は、ほぼ例年並みである。

### (2) 長所と課題

「リーダーシップ能力」、「協働性」を除く項目は80%を超え、概ね学修成果を達しているといえる。また、前年度の課題であった「外国語運用能力」は、若干ではあるが改善傾向にある。

### (3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

「リーダーシップ能力」及び「協働性」の減少は、遠隔授業を中心に実施したことにより、「リーダーシップを発揮できる機会」や「他の人と協力して物事を進める機会」が減少したこと起因すると考えられる。そのため、対面授業や課外教育・課外活動の機会が増加すれば改善されると推測できる。ただし、遠隔授業においても、「リーダーシップ能力」や「協働性」を養うために、グループディスカッションやプロジェクト型学修をより一層取り入れるなど教育内容・教育方法の工夫が求められる。

# 商学部

## 1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表」(よく18.0%、ときどき53.9%)、「教員への質問」(よく9.2%、ときどき47.7%)はほぼ例年並みであるのに対し、「学生同士が議論する授業」(R2:54.1%、R1:66.0%)、「演習、実験、実習、フィールドワークなどの体験授業」(R2:33.0%、R1:42.1%)は前年度と比べ10%程度減少している。一方、「定期的な小テスト・レポート」(よく76.8%、ときどき20.2%)、「教材・課題の受け取りや提出にBlackboard、E-mail等を活用」(よく88.3%、ときどき10.3%)では、「よく」の割合が前年度に比べ倍増している。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「授業や課題のためにインターネットを活用」(よく64.4%、ときどき31.1%)はほぼ例年並みだが、「よく」の割合が前年度に比べ15.1%増加している。「他の学生と授業内容を話し合ったり一緒に勉強した経験」(R2:47.7%、R1:76.9%)、「図書館の活用」(R2:31.1%、R1:59.0%)では前年度に比べ30%弱減少している。「教職員への学修に関する相談経験」(R2:26.1%、R1:34.6%)は前年度に比べ8.5%減少している。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たりの出席科目数」が「13科目以上」(48.3%)と多いものの、「授業時間以外の勉強時間」は「1～3時間」(42.4%)、「4～6時間」(20.9%)である。「授業と関連しない読書時間」は「1～3時間」(36.2%)、「全くない」(31.7%)はほぼ例年並みである。「アルバイトの時間」では、前年度に比べ「19時間以上」(34.2%)は10%以上減少し、「全くない」(21.5%)が10%近く増加している。また、「部活・サークル活動」も「全くない」(75.8%)が前年度に比べ大幅に増加している。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

前年度と比べ、「一般的な教養」(94.5%)、「専門知識・技能」(95.0%)、「情報収集能力」(95.8%)、「課題発見・解決能力」(94.7%)、「社会が直面する課題を理解する力」(90.5%)、「外国語運用能力」(81.1%)、「文章表現能力」(94.5%)、「コンピュータ活用能力」(97.4%)はほぼ例年並みであるが、「協働性」(76.4%)、「リーダーシップ能力」(67.9%)、「プレゼンテーション能力」(80.0%)は11.5～17.8%減少している。

### (2) 長所と課題

「協働性」と「リーダーシップ能力」を除く項目は80%を超えており、概ね学修成果を達成している。前年度の課題であった「外国語運用能力」はプラス1.8%となっており改善傾向にある。

### (3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

「協働性」と「リーダーシップ能力」の低下は、遠隔授業による影響が考えられる。商学部ではPBL型授業の拡充に取り組んでおり、今回の結果を今後の取り組みに生かしていく。

# 政経学部

## 1. 本年度の授業の中での経験について

授業形態が遠隔授業中心になったことを受けて、「学生同士の議論」(R1:60.5%→R2:48.3%)、「演習、実験、実習、フィールドワークなどの体験授業」(41.6%→27.4%)は、前年度と比較して10%以上減少した。反対に、「Blackboard、E-mail等を活用」(90.4%→98.8%)、「定期的な小テスト・レポート」(94.9%→99.2%)は、遠隔授業に必須の項目のため増加し100%に近づいている。「発表」(74.4%→71.8%)、「教員への質問」(61.6%→61.5%)はほとんど変わらなかった。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

前年度と比較して、「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」(71.6%→44.6%)、「図書館で調べた経験」(66.9%→38.8%)は、対面機会の減少、入構規制などの影響で著しく減少した。「インターネットでの情報収集経験」(90.4%→95.0%)は上昇したが、「教職員への学修に関する相談経験」(36.7%→29.9%)は減少している。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「出席科目数」9科目以上の学生の割合は、前年度より増加している(77.3%→85.3%)。「部活動・サークル活動参加」をしていない学生が増加(52.7%→76.3%)、「アルバイト・就労」は19時間以上の割合が減少(45.1%→29.3%)し、全くないが増加(14.0%→26.1%)、「趣味活動」は19時間以上の割合が減少(38.4%→30.2%)した。「授業時間外での学修・経験」、「読書時間」に関しては前年度とほぼ同様であった。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

ほぼすべての項目で前年度と同様80%以上が「身に付いた」と回答している。

### (2) 長所と課題

ディプロマ・ポリシーに掲げた「幅広い教養の修得」、「専門的知識・技能の修得」、「問題発見解決能力の修得」に関わる項目では90%以上の学生が「身に付いた」と回答した。一方で、遠隔授業導入の影響で「コミュニケーション・協働力の修得」に関連する、「他の人と協力して物事を進めていく力」(91.8%→72.8%)、「発表する力」(89.6%→82.3%)、「リーダーシップを発揮できる力」(80.7%→62.8%)は減少した。

### (3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

遠隔授業における学生参加・コミュニケーションが大きな課題であるが、本年度の授業形態は特殊事例であるため、今後この課題にどこまで対処するかは難しい問題である。しかし、遠隔授業が継続されている期間における学生のケアの充実(丁寧な連絡・返信、遠隔でのオフィスアワーの充実等)に取り組むことは必要である。

# 外国語学部

## 1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題の発表」、「教員への質問・意見」は全体の平均を上回っているが、前年度よりも数値を落としている。一方で、「学生同士の議論」は前年度を上回っている。「演習・実験・実習・フィールドワーク」は前年度の53.2%から28.3%と大幅に減少している一方で、「BlackboardやE-mailの活用」は前年度の84.2%から98.2%と大幅に数値が上がっており、いずれもオンライン授業の影響によるものと思われる。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「共同学習」、「インターネットの活用」は、学部の平均を上回っているが、「教員に相談」、「文献の調査」は学部の平均をやや下回っている。また全体として、「インターネットの活用」は96.3%で前年度の97.0%とほぼ変わらないものの、それ以外の項目は前年度の平均より大幅に下回っている。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

前年度に引き続き、週当たりの「出席科目数」、「読書」や「部活動・サークル」の数値は低くなっている。一方で「授業外学修時間」の数値は高い。外国語学部の一つ一つの授業のウエートが高いと感じられていることが示唆される。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

「専門知識・技能」、「情報収集能力」、「協調性」、「リーダーシップ」、「外国語の運用能力」、「文章表現力」、「プレゼン能力」に於いて、大学の平均値を上回っているが、いずれも、前年度の数値より下回っている。

### (2) 長所と課題

前年度に引き続き「外国語の運用能力」は93.6%で、全体で最も高い数値を示している。大学の平均値90.8%を下回ったのは「社会が直面する課題を理解する力」88.6%で、社会に貢献する意識が課題となっている。

### (3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

外国語学部のディプロマ・ポリシーに掲げている専門知識やその運用、他者との協働等に関する項目については概ね目的を達成したと感じている。ただ、各調査項目に於いて、前年度よりも数値が下回っており、社会情勢の変化に伴う授業の質向上・改善が問われている。中でも「社会が直面する課題への理解」が課題となっており、語学を通して、多角的な視野を養い、世界全体への貢献について考える機会を設ける必要がある。

## 5. 学部・研究科設問項目について

外国語学部の「留学経験」はある計が36.0%(大学主催16.0%、個人10.0%)で、前年度の48.3%(大学主催35.5%、個人12.8%)を下回っている。語学検定試験はTOEICの全体の数値が57.5%で前年度の64.5%を下回っている。学生のモチベーションを絶やさないう、世界情勢を鑑み、海外での語学研修を進める方策を引き続き検討していきたい。

# 工学部

## 1. 本年度の授業の中での経験について

「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」が19.9%減となったが学部で最も高い数値(学部全体38.4%:工学部70.7%)であり、コロナ禍で減少したものの工学部の特徴が表れている。一方、「学生同士が議論する授業有無」が11.4%減となり、学部全体平均まで減少した(学部全体59.1%:工学部59.8%)。友人との交流の減少を感じた学生が増えている。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無」は前年度同様に低い(学部全体31.3%:工学部22.0%)。一方、「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無」(学部全体51.5%:工学部57.6%)、「教職員への学修に関する相談経験有無」(学部全体30.5%:工学部35.9%)は全体と比較して5%以上高く、前年度と同様の値を維持している。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「授業時間以外での授業関連学修・経験時間」は、3時間以下である学生が38.7%と学部最少であるが、前年度47.1%、前々年度53.7%であり改善傾向にある。一方、19時間以上取り組んでいる学生(13.5%)は学部最多である。「読書時間」が少ない(「全くない」32.6%は学部最多)、「部活・サークル活動」、「アルバイト・就労時間」が少ないのは前年度と同様である。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

「一般的な教養」、「専門知識・技能」、「情報収集力能力」、「課題発見・解決能力」については、いずれも95%を超え、前年度と同等の高い値を示している。一方、「リーダーシップ能力」、「外国語運用能力」については、前年度と同様、全学部の中で低い数値を示した。

### (2) 長所と課題

大きな長所は、「専門知識・技能」の「身に付いた計」(97.0%)が「よく身に付いた」(21.5%)とともに学部最多となった点である。コロナ禍において、前年度と比べて僅かであるが増加している(7%増)。課題は、学部最下位の「外国語運用能力」である(全体81.6%、工学部72.4%)。前年度(62.3%)に比べて改善しているが、学部間順位は同じである。

### (3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

ディプロマ・ポリシーにおける「ものづくりを通じて協働できるコミュニケーション能力」に関連する項目、「他者と協力する力」、「リーダーシップ能力」、「外国語の運用能力」が身に付いたと感じる学生が少ない。この点に関し、本年度より再編された新しいコースの効果、シラバスを利用した育成能力の意識付け、実験・実習・演習の工夫等を検証していく。

# 国際学部

## 1. 本年度の授業の中での経験について

「課題を発表する授業」は「あった」が88.7%、「学生同士が議論する授業」も79.1%と、前年度よりさらに増加した。この点、コミュニケーション力、実践力を重視する国際学部のディプロマ・ポリシーに沿った授業が行われていると評価できる。一方、「教員への質問の有無」は63.9%と若干減少し、「演習など体験授業」は35.8%と前年度より約15%減少したが、課題であった「BlackboardやE-mailの活用」は98.5%と前年度より約15%増加した。これらの変化は、主にコロナによる遠隔授業実施の結果と考えられる。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「授業内容など他の学生と話す」が58.8%と約20%の減少、「教員に相談する」も32.5%と約6%減少、「図書館を利用する」は33.4%と30%以上の減少が見られた。これらはいずれもコロナの影響と考えられ、通常の対面授業ができるようになった時点で回復することを期待したい。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「13科目以上出席している」が51.9%(前年度47.5%)と全学トップで、前年度より増加している。また、「授業時間外学修」が「全くない」が11.0%と、前年度の11.6%から微減した。他方、「授業と関連しない読書時間」があった学生71.6%、「部活・サークル活動参加時間」31.0%は、全学トップ又は2位の数値であり、幅広い関心を持ちつつ、授業と課外活動の両方に取り組む国際学部生の姿勢が窺える。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

「身に付いた計」が95%以上、又は全学で最も高い数値となっている項目がほとんどであり、ディプロマ・ポリシーで示す各能力について、十分達成していると評価できる。

### (2) 長所と課題

「良く身に付いた」+「身に付いた」の計から見ると、「リーダーシップ力」、「社会が直面する課題の理解力」、「他の人と協力して進めていく力」の3項目は2年連続全学トップ、「発表力」は今回全学でトップの数値であり、国際学部生の長所と考えられる。他方、「専門分野」、「情報収集力」、「課題発見・解決力」の3項目は全学最下位となっており、課題となっている。

### (3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

幅広く国内外の課題に向き合い、ゼミ生同士が協力しながら自主性、発表力、実践力等を磨いていくゼミ等での取り組みの効果が発揮されており、そうした取り組みを継続・発展させていく一方、コース専門科目やゼミ、卒論執筆等を通じて、より学生の専門性、情報収集力、課題発見・解決力の向上を図っていく必要がある。

## 5. 学部・研究科設問項目について

「国内・国外におけるボランティア・NGO活動参加」については前年度の38.0%から22.4%に減少した。これは、主にコロナにより実質的な活動が不可能となったことが原因と考えられ、コロナ収束後に徐々に回復することを期待したい。

# 経済学研究科

## 1. 本年度の授業の中での経験について

令和2(2020)年度調査には17名が回答。外国人留学生が多い(13名)。「自分の考えや課題を発表」及び「Blackboardの活用」94.1%、「教員に質問や意見」及び「定期試験・レポート」88.2%がありとした。これらに比べると「体験授業」70.6%、「学生同士の議論」52.9%がやや少なかった。いずれも例年並みであるが、「教員に質問や意見」、「学生同士の議論」については前年度から低下している。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

上位から「インターネットでの情報収集」100%、「教職員への相談」82.4%、「他の学生と一緒に勉強」76.5%、「図書館での文献研究」58.8%となっている。前年度よりもインターネット利用が増えているが、それ以外の学修態度は低下している。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「履修科目数」は7科目以上が41.2%を占める。「授業時間外での週当たり勉強時間」は10時間未満が35.3%である。「アルバイト時間」は「全くない」47.1%であり、「13時間以上」23.6%であった。履修科目数が少ない理由は、修士2年以上では論文作成に注力していることによる。授業時間外の勉強時間は前年度よりも増加している。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

「専門知識・技能」、「情報収集能力」、「課題発見・解決能力」、「社会課題の理解力」、「プレゼンテーション能力」、「文章表現能力」、「コンピュータ活用能力」が100%であり、「協調性」94.1%、「リーダーシップ能力」及び「外国語運用能力」82.4%がやや低かった。いずれもほぼ例年並みである。

### (2) 長所と課題

本研究科では講義科目において高度知識を教授し、演習科目において論文作成指導を行うことから専門力、問題解決力を育成している。座学および個人研究を主とする学修であるため、他学生との相互学習の機会が少ない。

### (3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

令和2年度には対面授業が限られたことにより、留学生の日本語能力が伸び悩んだ。令和3年度以降には、通常の専門科目・演習科目においても言語力の習得に留意する。

# 商学研究科

## 1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業の有無」、「教員への質問あるいは意見を述べた経験」、「学生同士が議論する授業の有無」、「定期的な小テスト・レポートのある授業の有無」、「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業の有無」については、各質問項目で90%程度の肯定的な意見がみられた。他方、「演習やフィールドワーク等の体験授業の有無」については約30%が否定的な回答となっている。この数字は他研究科と比較すると相対的には低い数字となっている。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験の有無」については約40%の否定的な回答となっている。また、「授業や課題のために図書館で資料や文献を調べた経験の有無」、「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験の有無」の回答結果から類推すると、図書館の有効活用されていないこと、単にインターネットで調べる学習が行われていることが伺える。さらに、「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験の有無」との関連でいえば、個人学習が中心に行われており、授業時間外での院生同士のコミュニケーションが活発には行われていないことを示している。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」では授業外の学修時間が4時間未満の学生が50%を占め、「週当たりの授業と関連しない読書時間」でも1日1時間程度の時間しか読書に費やしていないことが伺える。「週当たりのアルバイト・就労時間」については、アルバイトをしていない学生が28.6%、アルバイトをしている学生が71.4%であり、アルバイトをしている学生のうち就業時間が週に19時間を超える学生が28.6%いる。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

すべての質問に対しては概ね100%に近い肯定的な回答(身に付いた)を示しているが、「他の人と協力して物事を進めていく力」、「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」、「社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」、「外国語の運用能力」の質問では10%程度の否定的な回答も見られた。

### (2) 長所と課題

学問的知識の修得や情報収集力・課題発見能力・プレゼン能力、文章表現力、PC利用技術等については学生自身の意識でも入学後の能力向上を実感していることを窺い知ることができる結果となっている。しかし、他方で他者との関係において、リーダーシップを発揮する能力や他人との協業作業やその推進能力については「ほとんど身に付いていない」と回答する一定数の学生がいる。この点については課題といえるだろう。なお、前年度との比較において顕著に変化した項目はとくに見受けられない。

### (3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上記のリーダーシップを発揮する能力、他人との協業作業やその推進能力の向上という課題に対して、すべての授業で対応することは難しいかもしれないが、これらの要素を取り入れた授業展開については検討の余地があろう。商学研究科全体として各教員と問題意識を共有し、今後検討する必要がある。

# 工学研究科

## 1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業」は、100%で(60%はよくあった、40%はときどきあった)、「教員への質問・意見」も100%であった(70%がよくあった、30%がときどきあった)。オンライン授業にもかかわらず、「演習、実験、実習、フィールドワークなどを通して体験する授業」が70%もあったのは、教員が工夫に寄るところが大きい。「定期的に小テストやレポートが課せられた授業」は、100%であった(60%がよくあった、40%がときどきあった)。「Blackboard、Teamsなどを活用した授業」は当然ながら100%であった。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生と授業内容について話し合ったり、一緒に勉強したりした」のは70%であったが、初めてのオンライン授業でチーム(個別グループ)に入ってということを考えれば、致し方がないところである。「教職員への学修に関する相談」は、あった計が80%であった。「授業や課題のために図書館で資料・文献を調べた」ことは、あった計が80%であり、前年度が59.1%であったことを考えれば、オンライン授業の副次的効果と捉えることができる。「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験」は、当然ながら100%であった。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「授業出席科目数」は、1～2科目が最も多く40%、次いで5～6科目が30%、7～8、8～9、13科目以上がそれぞれ10%であった。「授業時間以外に授業と関連した学修や経験時間」は、4～6時間が最も多く30%、次いで1～3時間が20%、7～9、10～12、16～18、19時間以上、全くないがそれぞれ10%であった。これに対して「週当たりのバイトや仕事」を見ると19時間以上が30%、13～15、10～12時間がそれぞれ10%、4～6時間が20%となっており、コロナ禍においても前年度以上の比率(%)からみれば経済的支援を要する学生の存在が浮き彫りになったように感じる。

## 4. 入学時と比べ現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

「他人と協力して物事を進めていく力」は80%であり、前年度の95.5%よりも下がっているがTeams等を使った授業になったことを考えると致し方のないことである。また、「リーダーシップを発揮できる力」は、80%(前年度90.9%)についてもグループワークが簡単に行えない環境であったことからすればまずまずと見るのが妥当である。

### (2) 長所と課題

「外国語の運用能力」は、身に付いた計が100%であったことと、「学修した内容をまとめて発表するする力」が、100%に達しているのは、長所と見るが、国際学会での発表を全員に義務づけているわけではないため、少し身に付いた(20%)で終わっている学生のレベルアップが今後の課題である。

### (3) 教育課程や授業方法・内容などの改善方策

新型コロナの影響でオンライン授業を余儀なくされたことをチャンスと捉えれば一気により良い方法に変えることができる。学修のための予習や復習などは、クラウドにアップロードしコメントを入れることで質の高い授業を可能にすることができるが、その仕組み作りの検討が必要である。

# 言語教育研究科

## 1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表」、「教員への質問・意見」については、「よくあった」が82.4%と高い。また、前年度との比較では、それぞれ15.7%、7.4%増加した。一方、「演習、実験、実習、フィールドワークなどの体験授業」については、「あった計」が47.1%と低く、前年度との比較では15.4%減少した。その他の項目は、「あった計」が80.0%以上で、例年並みである。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「インターネットでの情報収集」を経験した学生の割合は例年100%であり、本研究科の特徴となっている。「授業のための図書館での資料等調査」は70.6%(前年度比29.4%減)、「教職員への相談」は64.7%(前年度比27.2%増)、「他の学生との授業内容に関する話し合い」は58.8%(前年度比32.9%減)であり、学生間の意見の交流に関してはやや少ないが、本年度が例外的である。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「授業出席科目数」は、「1～2科目」が29.4%と最も多いが、ほぼ例年と同じ傾向である。「授業時間以外での授業関連学修・経験時間」、「読書時間」は、前年度と比較し増加している。一方、「アルバイト時間」は「全くない」が35.5%(前年度比31.1%増)で、総体的にみて減少している。「個人的な趣味活動時間」は、ほぼ前年度並みである。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1)学修成果の達成状況

ほとんどの項目は、ほぼ前年度並みで85%以上であるが、「他の人と協力して進める力」70.6%(前年度比16.9%減)、「リーダーシップ能力」52.9%(前年度比17.9%減)は大幅に減少している。また、「社会問題の課題解決力」70.6%(前年度比4.4%減)は前年度に続き80%以下である。

### (2)長所と課題

「専門分野に関する知識・技能」から「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」まで全体的に平均的な結果となっている。特に、外国語の修得に限定されずにバランスの良い教育が行われているのが長所と言える。一方で、「他の人と協力して物事を進めていく力」、「社会問題の課題解決力」の評価がやや低いのが今後の課題として考えられる。

### (3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上記の点から判断して以下の2点が今後の改善策として考えられる。

①人数が少ないゼミ形式の授業が多いとは思われるが、ゼミの中だけでなく学年や専門を超えた学生同士の勉強会等の中での交流が求められる。

②社会問題解決能力に関しては、OB・OG(中高の英語教員、日本語教員、大学教員)との交流の中で日本社会における言語教育の何が問題なのか意識するだけでも効果的なのではないかと思われる。

# 国際協力学研究科

## 1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業」や「教員への質問・意見を述べる」という点においては良好な結果であった。一方、「学生同士が議論する授業」や「体験授業の有無」の項目では、コロナ禍による遠隔講義の影響が出ている。「Blackboardやメールを活用した教材・課題の受取りや提出」は活発化しており、「小テストやレポートを課す講義」も改善された。学生同士の議論や体験授業をどのように確保していくかが今後の課題である。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

講義の遠隔化により、「学生同士の勉強」や「図書館を利用する機会」が減少していることがアンケート結果に表れている。学生同士での勉強の機会をつくるために、グループ向けの課題を出すなどの工夫が必要である。図書館については、図書の郵送サービスなどを利用するように学生に働きかけていきたい。

## 3. 本年度の週当たりの学修等時間について

遠隔授業の影響を受けてのことか、「週当たりの授業出席科目」が増加している。「授業時間以外での学修時間」では、短時間の層は若干改善されたが、長時間の層は減少しており、注視する必要がある。一方、「読書時間」や「趣味の時間」は増加しており、バランスのとれた学生生活を送っている。しかし、これはコロナによる「アルバイト時間」の短縮が原因かもしれず、金銭的な問題が生じていないか注視していく必要がある。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

コロナ発生前後を比較すると、大きな変化はみられない。概ね良好なアンケート結果となっている。今後も学生の能力向上に資するような取り組みを行っていく。

### (2) 長所と課題

前年度に比べて、「他の人と協力して物事を進めていく力」の項目が改善された点は好ましい結果である。今後の課題は「リーダーシップを発揮できる力」の養成である。この2つの項目は、国際協力活動に不可欠な能力であることから、高いアンケート結果が出るような取り組みを行っていきたい。

### (3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

演習科目において学生主体の授業運営法を導入し、リーダーシップ力の育成を図っていく取り組みを行っていくことにする。

# 地方政治行政研究科

## 1. 本年度の授業の中での経験について

調査時点の本研究科修士課程2年生在籍総数4名の内、全員(留学生1名)が回答した。

学修行動調査結果の「よくあった」又は「どきどきあった」を選択した回答を「あった」とすると、「自分の考えや課題を発表」、「教員への質問・意見」、「学生同士の議論」を経験した学生の割合は100%(4名)であった。「定期的な小テスト・レポート」は75%(3名)であった。「Blackboard・E-mailの活用」の経験については、50%であった。他方、「あまりなかった」又は「まったくなかった」を選択した回答を「なかった」とすると、「演習、実験、実習、フィールドワークなど」は75%が「なかった」と回答している。以上のことから、学内の授業における教員と学生による活動は活発に行われた一方、学外での経験がほとんどなかったことが分かる。この結果は、前年度と比べ、回答数が異なることから一概には言えないが、学外での経験の減少を表している可能性がある。

## 2. 本年度の授業時間外の学修態度について

上記と同様の基準を用いると、「授業や課題のためのインターネットでの情報収集」を経験した学生の割合は100%、「授業のための図書館での資料等調査」は75%であった。他方、「他の学生との授業内容に関する話し合い」と「教職員への相談」は50%であった。学生が、授業時間外の学修活動として、他の学生や教職員との接触を抑制しながら、インターネットや図書館を活用することにより、個人での課題等の準備をしている様子が表れている。この結果は、前年度と比べ、学生が授業時間外に他の学生や教職員と自発的に関わりながら課題等の準備を行う経験の減少を表している可能性がある。また、前年度向上の余地ありとした「授業のための図書館での資料等調査」の経験については、改善傾向も見られる。

## 3. 本年度の適当な学修等時間について

「授業出席科目数」は、「13科目以上」と「1～4科目」を回答した学生の割合が半々である。これは、「授業時間以外での授業関連学修・経験時間」が「19時間以上」と「1～6時間」を回答した学生の割合が半々であることの説明になっている。「読書時間」は「1～3時間」とした学生が75%、「アルバイト時間」が「19時間以上」とした学生が50%、そして、「個人的な趣味活動時間」は「4～9時間」とした学生が50%であった。以上のことから、修士2年で論文執筆をしながらも、ある程度の取り組みが行われたことが分かる。

## 4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

### (1) 学修成果の達成状況

10項目のうち7項目において「身に付けた」学生の割合は100%、「他の人と協力して進める力」は75%であった。「リーダーシップ」に関する割合は50%、「外国語の運用能力」に関する割合は25%(1名)であった。

### (2) 長所と課題

- ・長所: 授業を中心とした経験を通じ、概ね、能力の向上を実感していることが分かる。
- ・課題: 「リーダーシップ」及び「外国語の運用能力」については、向上の余地があるように見える。

### (3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

「リーダーシップ」に関する割合が50%であったことは、同項目に関する大学全体の傾向と重なる。「大学全体」の箇所にある通り、コロナ禍での遠隔授業の実施は、「他の人と協力して物事を進める機会」を減少させ、リーダーシップ発揮の機会を減少させたことが考えられる。遠隔授業における学生間の協働をいかに実現できるかが課題である。また、「外国語の運用能力」については、本研究科の「教育課程編成の方針」(アドミッション・ポリシー)及び「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)と照らし合わせると、それらの対象とはなっていない項目である。よって、今回の調査結果からは、回答学生については、概ね、本研究科の教育課程や教育内容・方法を通じて多様な経験を重ね、多様な能力を獲得していると考えられる。